

1991年12月20日 発行



# 寄せ蛾記

○ 石戸宿、その後

○ 「さいたまの蝶」

ミドリシジミに決定!

62号



埼玉昆虫談話会誌

## 表紙の昆虫

エンマコオロギ この夏、いたずらでオオカマキリを飼ってみました。餌は、主に自宅の庭のコオロギを捕まえて与えましたが、汁気のたっぷりあるコオロギが、カマキリの口に合ったらしく、見る見る大きくなって、野外のものよりも早く成虫になりました。

沢山捕まえることのできるコオロギは、肉食の昆虫を飼育するにはもってこいの飼料かもしれないと思いました。　こおろぎさん　ごめんなさい・・・・・・・・

きり絵・・・・・・・・堤 啓輔  
表紙デザイン・・・・・・・・小堀 文彦

.....

## 石戸宿, その後 (1)

碓井 徹

.....

### はじめに

当会が北本市石戸宿の農事試験場跡地の昆虫相を調査したのが1985年, そして, その調査結果をまとめた『寄せ蛾記 48号 北本市石戸宿の昆虫類 (特集号)』を1986年10月に発行してから, すでに5年が経過した。当地は, 1985年に朝日新聞社がおこなった『埼玉の自然 100選』でも得票数1位で選ばれ, また, 埼玉県が『自然学習公苑 (当時の仮称)』をこの地に開設する構想を発表していたこともあって, 北本市石戸宿に1,000種以上の昆虫が生息することを明らかにしたこの『寄せ蛾記 48号』は, 発行当時, あちこちのマスコミに取り上げられたのだった。

それから5年, 当時の, 正味約1年の調査では不十分だと考えた会員の中には引き続き石戸宿の昆虫相の調査を続けた者もあり (筆者もその一人), また, 『寄せ蛾記 48号』を読んで, そこに豊かな魅力的な自然環境を感じとった昆虫研究者や愛好家も相次いで当地を訪れ, それぞれこの地の昆虫相解明に新たな成果をあげてきた。加えて, 北本市は市史編纂事業の中で『北本市史 第三巻上 原始・自然資料編』を1990年に刊行して, 石戸宿を含む北本市全体の自然環境の現状を明らかにした上に, より精緻な自然環境の把握を目指して1990年度から3年計画で『北本市自然委託調査』を, 多数の調査員を動員して開始している。

このように, 石戸宿周辺の自然環境に関しては, 資料の集積という面では着実に進んでいるものの, 肝心の自然環境そのものとなると, 6年前の当会の調査時点と比較してみると随分と悪化している現状を認めざるを得ない。

環境悪化の原因のひとつは, これは調査当時から明らかになっていたことであるが, 石戸宿の中心部の通称八重塚山上部の台地に『北里メディカルセンター』がオープンしたことである。現在でも台地上部では, 同センターに付属するグラウンドの整備工事などが進行中で, この3~4年, この大規模な医療施設の工事に伴って, 斜面林の縮小や緑地の減少, そして直接の因果関係は把握できないものの, 石戸宿全体の乾燥化が着実に進んでいる (写真1, 2)。

また, 県の『自然学習公園』開設のための整備事業もすでに始められており, 東側の湿地は駐車場にするためにすでに埋め立てられ, 北東側台地では観察舎 (学習センター) の建設工事が今夏より着手された (写真3)。そして, この公園の整備計画の中には, 無謀なことに, 残された中央部の湿地を潰して大きな池を造るという話まで伝わってきている。

筆者は, 大宮台地の自然環境の良い所を1カ所に凝縮したようなこの北本市石戸宿の自然, 特に他の地には例を見ないほど凝縮されている良好な水域環境の多様性に大きな関心を持っており, 理科教育の現場にいる者としても, 県立の『自然観察公園』構想には大いに期待を抱いている者である。急速に緑地が失われつつある都市近郊部にこのような良好な自然環境が残されていることを高く評価し, 徐々に悪化しつつある当地の自然環境をこれ以上悪い状況に追いやらないためにも, そして, やがてオープン

する県立『自然観察公園』が、その名のとおりに、本当の自然を観察し学習できる場になることを期待して、当地の昆虫相を多角的にレポートする意図で『石戸宿、その後』を書き続けることにする。

この連載は不定期であるが、1986年の『寄せ蛾記 48号』をベースにして、その当時の調査の反省点なども交えながら、それ以降明らかになった昆虫相の知見を整理し、これからの石戸宿がどうあるべきかを論じてみたいと考えている。連載スタートの今回は、特に当地の水域環境の保全を訴えることを意図して、文献やデータなどをまとめてみた。

## 1. 1985年の埼玉昆虫談話会による調査について

埼玉昆虫談話会が1985年度の会の事業として取り組んだ『北本市石戸宿昆虫類調査』の調査方法などの詳細は、調査報告書にあたる『寄せ蛾記 48号 北本市石戸宿の昆虫類 (特集号)』に、本調査の計画責任者であった竹内崇夫氏が詳しく書いているが(竹内, 1986)、基本的には1985年の4月から10月にかけて、毎月1回の週末、土曜の夜の燈火採集と翌日曜日の日中の調査をセットにした定例調査を組み、ほぼ予定通りこの定例調査を7回実施した。もちろん、この他にも会員各個人が都合がつく日程で補充調査を実施し、中には延べ60回にもよる調査をおこなった会員もいた。

これらの調査結果をまとめたのが『寄せ蛾記 48号』であるが、そこには、以下のような分類群について(カッコ内は種数)、各報告者が種名リストと採集データを記している。

- |          |             |        |             |
|----------|-------------|--------|-------------|
| I. 甲虫目   | COLEOPTERA  | (463種) | 阿部 光典・笹井 厚子 |
| II. 双翅目  | DIPTERA     | (37種)  | 玉木 長寿       |
| III. 鱗翅目 | LEPIDOPTERA |        |             |
|          | 蝶類          | (51種)  | 山崎 正則       |
|          | 蛾類          | (414種) | 市川 和夫       |
| IV. トンボ目 | ODONATA     | (26種)  | 碓井 徹        |
| V. 半翅目   | HEMIPTERA   | (22種)  | 林 正美        |
| VI. 虫えい  | (Gall)      | (17種)  | 巢瀬 司        |

この他に、当会の団体会員である上尾高校生物部による“北本市石戸宿における蝶類成虫の発消長について”という報文も掲載されており、巻頭に“北本市石戸宿の昆虫調査について(竹内崇夫)”，末尾に“あとがき(市川和夫)”があって、この64ページという大作の『寄せ蛾記 48号』はできあがっている。

当時調査された分類群をみると、膜翅目 HYMENOPTERA と直翅目 ORTHOPTERA が欠落しているのがたいへん惜まれるが、当時、この分類群の調査に十分な時間を費やせる会員がいなかったことが原因であり、仕方のないことである。また、リストができた上記の分類群のなかでも、たとえば22種をリストアップした半翅目 HEMIPTERA のように、甲虫や蛾類などの調査担当者が、自分が担当する分野の調査の最中にたまたま採集した半翅類がいくつかあって、それを最終的に集めて林正美氏に急遽同定をお願いした経緯のものもあり、上記のリストが、同地の各分類群の種構成を十分に反映しているとはいえない部分もある。



写真1. 北里メディカル  
センター。

台地東側には、このよ  
うな立派な舗装道路が  
走り、かつての牧草が  
風になびくのどか風景  
は、消え去っている。



写真2. 上の写真のすぐ西側。

八重塚山上部の平坦地は、  
現在、グラウンド整備の  
工事が進行中である。  
緑地は急速に失われつつ  
あり、当地の乾燥化がた  
いへん心配される。

写真3. 自然観察公園  
学習センター  
工事（右端）。

メディカルセンター  
方面から桜堤方向を  
見ると、建築中の学  
習センターが目に入  
る。低湿地を見下ろ  
す高台に位置してい  
る。



また、当時の調査対象地域は、基本的には通称“桜堤”と呼ばれる土手の外側の農事試験場跡地に限定したものであったが、筆者が担当したトンボ類について考えてみれば、止水性のみならず流水性の種の生息も考慮して、土手の内側の旧流路を利用した釣り堀や荒川本流までも含めて調査した方がよかったと反省している。

その意味では、当時の夜間採集において、蛾類の担当であった市川和夫氏が灯火採集のセットを桜堤の外側斜面の中段でなく、車道が通っている上部に設置して、土手の外側のみならず荒川本流側の昆虫類をも誘引していたことは賢明な判断であった。

『石戸宿』という行政区分上の地名に固執すると、土手の内側の釣り堀や荒川本流は調査対象外になってしまうが、成虫の移動力を考え、なおかつ土手の両側とも一続きの生態系として理解すれば、今後の当地の調査は、土手の外側にも十分に目を向けるべきであろう。この事については、別項にて詳しく後述する。

## 2. 1987年以降の昆虫相に関する知見など

『寄せ蛾記 48号』発行後、当地で調査を続ける会員諸氏から随時“北本市石戸宿で・・・を採集”という短報がその後の『寄せ蛾記』誌上で発表されており、特に、蝶類とトンボ類でそれが顕著である。また、当時の調査では不十分だった半翅類相に関しては、林・碓井(1990, 1991)が150種ほどを報告しており、調査のできなかつた直翅目については、『北本市自然委託調査』の成果として、すでに北本市石戸宿を中心とする地域から50種近くの生息が報告されている(内田, 1991a, 1991b)いる。また、北本市が1990年に刊行した『北本市史 第三巻上 原始・自然 資料編』にも、当地の昆虫相に関する記述があり、同市はこの年に新たに『北本市自然委託調査』を3年計画でスタートさせている。

本項では、これら1987年以降にあきらかになった同地の昆虫相に関して、関連する文献などを紹介しながら、知見の整理をしてみたい。

### 1) 新知見の整理.

#### I. 甲虫目 COLEOPTERA

阿部(1990)は、石戸宿の土手の内側の荒川本流近くでサワダマメゲンゴロウを採集し、これを本種の埼玉県初記録として発表している。これで、阿部・笹井(1986)とあわせて、464種が当地から記録されたことになる。なお、当地に産することが話題となったオオイチモンジシマゲンゴロウについては、レッドデータブック(環境庁編, 1991)によれば、『ホンシュウオオイチモンジシマゲンゴロウ』の和名で、【危急種】の選定を、また、阿部・笹井(1986)では『非常に珍しい種』と注釈が付されているセスジガムシについては、レッドデータブックでは【希少種】の選定を受けている。レッドデータブックによるこの2種の扱いに関しては後述する。

#### II. 双翅目 DIPTERA

玉木(1986)が37種を記録して以降、当地での双翅目の記録は発表されていない。

#### III. 鱗翅目 LEPIDOPTERA

蝶類に関しては、山崎(1986)以降、いくつかの種が当地に産するとして報告されている。ま

ず、斉藤 (1988) は、ミヤマセセリを記録した。本種は、1985年の当会の調査では『当地に生息していると思われるが発見できなかった』といったニュアンスで受け止められていた種であるが、1988年5月1日に1♀が斉藤章氏によって採集された。この採集個体は『寄せ蛾記 57号』の表紙を飾ったが、その後、当地では本種の記録はない。同じくセセリチョウ科で、佐藤 (1987) はチャバネセセリを記録した。本種は、その後も同地で秋季に毎年採集されている。アゲハチョウ科では、碓井 (1988c) がジャコウアゲハを記録した。この種は、個体数は多くないものの、春から秋にかけて時折見かけることができる。また、夏から秋にかけて台風が多かった1991年は、関東地方各地でコノマチョウ類の記録が目立ったが、当地でも、斉藤 (1991)、碓井 (1991b) がクロコノマチョウを2頭ずつ記録した。この他に、目撃記録ではあるが、磯野 (1991d) は、モンキアゲハとアオバセセリを当地ではじめて記録しており、山崎 (1986) では記録の少なかったツマグロキチョウについては、上尾高校生物部 (1988) と中川 (1991) が、ウラナミアカシジミについては斉藤・島崎 (1987) が、それぞれ当地での採集記録を複数例発表している。これで、山崎 (1986) の51種に、ミヤマセセリ・チャバネセセリ・アオバセセリ・ジャコウアゲハ・モンキアゲハ・クロコノマチョウの6種が追加されて、57種のチョウが石戸宿から記録されたことになる。

この逆に、1985年の調査以降、目撃すらされていない種をあげてみると、コツバメ・コジャノメ・ホソバセセリの3種である。この3種に関しては、山崎 (1986) に記された記録そのものが偶産記録である可能性もあろう。また、この数年の間、筆者は石戸宿でジャノメチョウを目撃していないのも気になるところである。1985年の調査当時は、当地の台地には牧草が広がり、ここから台地斜面の草地にかけて本種を少なからず見ることができたが、少なくともこの3年間は本種を目撃していない。『北里メディカルセンター』の工事が始まったのとほぼ期を同じくして、本種の姿が消えたように思えてならない。おそらく1980年代の大宮台地では、北本市石戸宿は本種の最後の生息地であったと思われるだけに、当地での生息を再確認したいものである。

蛾類に関しては、市川 (1986) が414種を発表しているが、その後は新たにリストに加える種は報告されていない。市川・利根川 (1988) が、キノカワガとフクラスズメの2種について、当地での1月の記録を1例ずつ加えているのみである。

#### IV. トンボ目 Odonata

筆者は1985年の調査で採集した26種をリストアップしたが (碓井, 1986), その後の会員諸氏の丹念な調査により、当地で記録されたトンボ類の種数は現在では41種に達した。この詳細については、別項で後述する。

#### V. 半翅目 Hemiptera

当地の半翅類に関しては、林 (1986) が22種を報告しているが、これは前述したように、半翅類を専門的に調査したのではなく、ある意味では“片手間”的な採集品を寄せ集めて、当会の顧問である林正美先生に同定をお願いしたに過ぎないものであった。しかし、幸運な事に、筆者は1989年度に埼玉大学教育学部に内地留学し、生物学研究室に席をおいて林正美先生の下で当地の半翅類相を調査・研究する機会に恵まれ、同年4月から11月にかけての調査で、当地から約150種の半翅類昆虫を記録した (林・碓井, 1990, 1991)。また、この報告と前後して、碓井 (1988b)

はクマゼミを, 林 (1990) はハルゼミ・ヒグラシを, 林 (1991) はニイニイゼミを, それぞれ当地から記録されたセミとして報告している。

次に, 当地の半翅類昆虫に関するこれらの文献などのいくつかを簡単に紹介し, 当地の半翅類相について気がついた点を述べておきたい。

A. 林正美・碓井徹, 1990. 埼玉県におけるアメンボ4種の記録. *Rostria*, (40):657-661.

本報文で記録された4種のアメンボ科昆虫は, 次のとおりである。

*Limnoporus esakii* MIYAMOTO エサキアメンボ

*Gerris insularis* (MOTSCHULSKY), ヤスマツアメンボ

*Gerris babai* MIYAMOTO ババアメンボ

*Gerris amembo* ESAKI et MIYAMOTO ハネナシアメンボ

本報文では, これら4種のアメンボのうち, ハネナシアメンボを除く3種について, 採集地の一つとして北本市石戸宿を挙げており, 全国的に生息地の少ないアメンボの稀少種が3種とも当地に生息しているという事実は, 注目に値する。この中のヤスマツアメンボは, 水温の低い湧水によってできた暗い水溜まりなどに限って生息する中型のアメンボで (写真4), 本種が当地の数ヶ所から採集されたことは, 良好な自然環境の中に湧水が噴

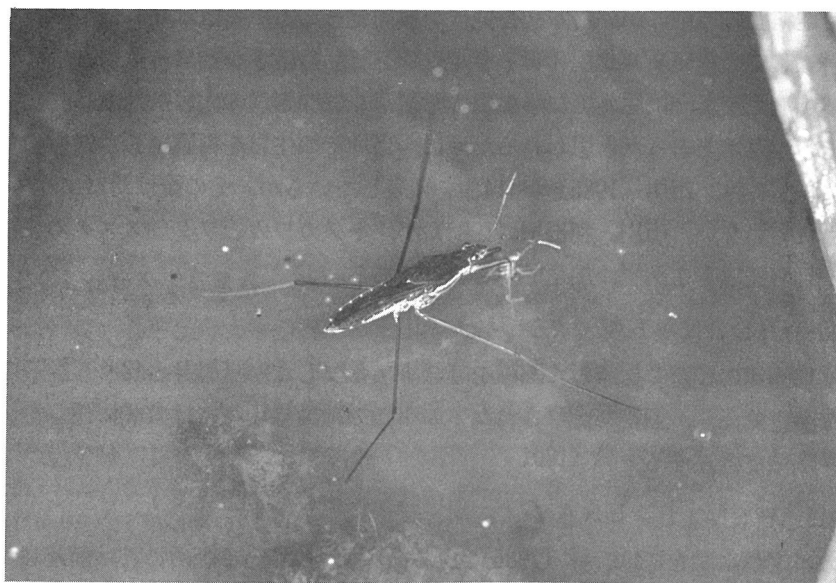


写真4. ヤスマツアメンボ 石戸宿の湿地にて(筆者撮影)

出するような環境が、この地に点在することを示しているといえる(林・碓井, 1991)。当地における本種の生息環境について詳しく調査してみると、石戸宿中央部にある低湿地の南側辺縁部に形成されている、湧水による小規模な湿地に、八重塚山の斜面林下端が日陰を作っているような冷暗所に限って、本種の姿を確認することができた。近縁種で、関東地方では主に流水環境に稀ではないコセアカアメンボと比較して、本種はかなり特異な環境を生活の場としている印象が強い。林・碓井(1990)によれば、本種は埼玉県内の9カ所から記録されているが、大宮台地ではこの北本市石戸宿のみであり、このことは、この地が前述のような特異な水域環境を保全している貴重な地域であることを示していると言える。本種の生活環境の主たる要因である、低水温の湧水とそれが形成する小湿地、樹陰などによる冷暗な水面などは、人為的な自然環境の改変によっていとも簡単に消滅してしまう微妙な環境要因ばかりであり、今後の当地の環境変化の内容によっては、本種が当地から姿を消してしまう危険性が非常に高いと考えられる。

エサキアメンボとババアメンボの2種は、レッドデータブックで【希少種】の扱いを受けている貴重なアメンボである。立川(1985)によれば、エサキアメンボは全国でわずかに9カ所からしか記録されておらず(1985年時点、この時点では埼玉県未記録)、そのうちの3カ所からはすでに本種は姿を消しているという。また、それら9産地のすべてが標高100m以下の低地にある成立の古い池沼であり、人工の溜池、水田、一時的な水溜まりには生息が不可能であるという。その後、佐藤(1988)は栃木県から4カ所の新産地を報告し、林・碓井(1990)は埼玉県下から7カ所の産地を記録したが、いずれにしても、全国的に見ればたいへん貴重な種であることにはかわりない。本種の生息地が、水生植物が豊富に生育する成立の古い池沼であり、このような水域環境が急速に失われて、すでに遺存的分布へとかわりつつある現在、本種の既知産地をその環境を含めて保護していくことは非常に重要なことであり、その意味で、北本市石戸宿に自然観察公園が開設される意義は(現在の水域環境が保全されるならば)大きいと言える。ババアメンボも、日本では北海道、青森県(中津軽、上北地方)、新潟県(越後地方)、茨城県(那珂湊市)、静岡県(磐田市)などから局地的に知られているにすぎない種で(林・碓井, 1990)、エサキアメンボに似た水域環境を好む希少種である。当地における水生昆虫類の調査でも、この2種は、ヨシの群落内の狭い水面上でしばしば同時に発見されている。

#### B. 林正美・碓井徹, 1991. 北本市石戸宿の半翅類相.

埼玉大学紀要教育学部(数学・自然科学). 40(2):7-22.

本報文は、1989年の4月から11月にかけて、当地の半翅類昆虫を調査・研究したものをまとめたものである。本調査で採集された半翅類昆虫は、未同定の数種を含み約160種で、少なくとも属レベルまで同定されたものは、異翅目25科70種、同翅目12科87種、計157種である。同報文でも触れているが、この157種に、林(1986)が記録した22種のなかで本調査で記録されなかった種や、林(1990)によるハルゼミの記録を含めると、これまでに北本市石戸宿では162種の半翅類昆虫が記録されたことになる。

## VI. 虫 え い (Gall)

巢瀬 (1986) が17種を記録して以降、当地の虫えいに関する報告はない。

## 2) 環境庁編, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物 — レッドデータブック — (無脊椎動物編)

環境庁によって昭和61年度から4年間にわたって進められてきた『緊急に保護を要する動植物の種の選定調査』作業は平成元年に一応終了し、この調査によって選定された動植物のうち、無脊椎動物410種・亜種を解説した本書が刊行されたのは1991年のことである。これら選定された種は、次の4つのカテゴリーに区分されている。

絶滅種 [我が国ではすでに絶滅したと考えられている種または亜種]

絶滅危惧種 [絶滅の危機に瀕している種または亜種]

危急種 [絶滅の危険性が增大している種または亜種]

希少種 [存続基盤が脆弱な種または亜種]

1985年の当会による北本市石戸宿での昆虫類調査、およびそれ以降の当地での調査で記録されている昆虫類のうち、このレッドデータブックに掲載された種は、オオイチモンジシマゲンゴロウ (ホンシュウオオイチモンジシマゲンゴロウ)・セスジガムシ・エサキアメンボ・ババアメンボの4種である。以下に、この4種についてのレッドデータブックの解説文を部分的に引用し、北本市石戸宿の現状と重ね合わせてみたい。

ホンシュウオオイチモンジシマゲンゴロウ *Hydaticus conspersus* REGIMBART, 1899

【危急種】 危急種として選定された5種の甲虫目昆虫の中の1種。

以下、レッドデータブックより本種に関する記述より部分的に転載(『』内)。

『〈摘要〉第二次世界大戦直後までは、東京都内でも記録されていたが、それ以降の都市の発展によって消え去った種といえる。近年の記録がないまま絶滅が心配されていたが、最近再発見されるに至った。しかし、ゴルフ場建設などの開発で、ひっそりと生活していた生息地としての低山帯の池沼が前面に押し出されたものであると考えられる。生息環境として、これ以上の後退は不可能と思われ、現在残されている生息地保全是急を要する問題といえる。また、本州から消え去ろうとしている現状から、詳細な調査による実態把握も緊急を要している。

〈分布の概要〉本州の関東地方から東北地方の低山帯に残された農薬が流入しない池沼で得られるが、個体数は非常に少なく、産地も限定されている。

〈生息地の条件〉低山帯で、豊かな植生に囲まれた池沼帯で、農薬が流入しないこと。

〈現在の生息状況〉近年の開発行為によって生息地が前面に押し出されてきて、再発見につながった。これ以上の開発は本種の生息に脅威となる。

〈学術的な意義と価値〉この種を含む一群のおもな分布域は東洋熱帯であり、本州での記録は分布の北限として熱帯系要素の遺存種となり生物地理学、系統学的にも非常に貴重な種といえる。

〈生存に対する脅威〉各種開発、とくにゴルフ場建設によって生息地が奪われている。低山帯の生息地のほとんどが、現在ゴルフ場の格好な場所として、失われようとしており、本種ほか

りでなく生物全体としても非常に危険な状況と考えられる。』

阿部・笹井 (1986) では、オオイチモンジシマゲンゴロウ *H. pacificus* AUBE という和名と学名を用いていたが、本書では上野ら (1985) に従って上掲の和名と学名を用いている。レッドデータブックの記述を読むとわかるように、本種の分布は主に低山帯であって、当地のような台地に産すること自体が稀なことであるようだ。

セスジガムシ *Helophorus auriculatus* SHARP, 1884

【希少種】 希少種として選定された38種の甲虫目昆虫の中の1種。  
 危急種についての記述とことなり、希少種には、各種に数行の解説がついているにすぎない。以下、本種の解説の全文を転載する。

『約100年前に記載されて以降未確認であり、数年前に関東で再発見されたというように希な種である。生息地は湿原内の水溜りのような環境で、再発見の場所も都市近郊に接することもあって、その後の開発によって消滅した。』

阿部・笹井 (1986) では本種の項に『非常に珍しい種』と注釈が付されている。

エサキアメンボ *Limnoporus esakii* MIYAMOTO, 1958

【希少種】 希少種として選定された9種の半翅目昆虫の中の1種。  
 以下、前種と同様に解説の全文を転載。

『細身の小型 (体長7~11mm) のアメンボ。体は褐色で、体側には銀白色の毛条をもつ。触角第4節はもっとも細い。本州・九州に分布し、ヨシの発達した池沼にすむ。解放水面を好まない。産地は局所的で、環境破壊によって減少している。』

ババアメンボ *Gerris babai* MIYAMOTO, 1958

【希少種】 希少種として選定された9種の半翅目昆虫の中の1種。  
 以下、前種と同様に解説の全文を転載。

『黒色で小型 (体長6~9mm) のアメンボ。体形はヒメアメンボに似る。北海道・本州に分布し、ヨシなどの水草が発達した池沼にすむ。産地はごく限られ、少ない。』

この2種のアメンボに関しては、当地での生息状況は前述したとおりだが、当地に産する1000種を越える昆虫類のうち、レッドデータブックに掲載されている4種がすべて水生・半水生の種であることは、当地の自然環境を考える上でたいへん暗示的である。また、同書の『昆虫類概説』には、以下のように水域環境の急速な悪化を指摘する記述もあり、抜粋し転載する。

(・・・前略)

『・絶滅危惧種について

ここには23種がとりあげられた。このうち9種は、湿地・池沼・河川・海岸など、いわゆる



ウェットランドに関係するもので、5種は石灰洞のみに生息するものである。いずれも急速にかついちじるしく減少が進み、放置すれば全個体群が消滅する危機にある。なお、イシムシやキイロネクイハムシのように、おそらく絶滅に近いと考えられるが確証の得られないものも含んでいる。

・危急種について

ここに選定された15種のうち、9種までがウェットランドに関係するもので、うち4種は水生、3種は湿地性、2種は海浜性である。日本における平地の生息環境が極端に悪化していることを、如実に表している。残りの6種はいずれも植生依存で、食草や生息地が極限されている。

・希少種について

ここに挙げられた167種については、重要性や情報量にかなりのバラつきがあり、現時点でも危急種に認定した方がよさそうなものから、単に情報が不足しているだけではないかと考えられるものまで、さまざまな段階の種が含まれている。移動性を欠き、個体群自体がもともと非常に小さいものや、小島嶼の固有種または亜種、分布域の辺縁種などが多い。ウェットランドに関係するものが多く選定されているのは、絶滅危惧種や危急種の場合と同様であるが、植生依存の種や捕獲圧に脅かされている種なども少なくない。』

(後略・・・)

これらの記述を、北本市石戸宿の自然環境と照らし合わせて考えてみると、当地の水域環境がたいへん良好な自然状態で現在まで保全されてきた実態が理解できよう。北本市石戸宿の自然環境といえば、野鳥と雑木林ばかりがクローズアップされる現実があるが、以上のような客観的なデータから判断しても、当地の自然環境の今後を考える上で最優先すべきことは、現在の水域環境をいかに保全するか、ということではないだろうか。筆者は、この地に大きな池を造る計画を持つという『県立北本自然観察公園』について、同公園の整備計画の担当者は、当地の現在の水域環境の重要性をしっかりと認識すべきであると考えている。

同公園と当地の自然環境の関係については、別項にて後述する。

### 3) 北本市史、第三巻上（自然・原始資料編）について

北本市は、市史編さん事業の中で、1990年に『第三巻上（自然・原始資料編）』を刊行した。

内容は、表題のとおり、自然編と原始編にわかれ、自然編の《第7章 北本の動物；第1節 北本の陸生動物》を市川和夫氏が、《同；第2節 北本の水生動物》を大熊光治氏が執筆を担当している。それぞれの節に石戸宿の昆虫相にかかわる記述があるが、そのほとんどが『寄せ蛾記 48号』およびその後に発行された『寄せ蛾記』からの引用であり、新知見は含まれていないが、唯一、陸生動物の記述の最後に、石戸宿にスズムシの野生種が生息していることが述べられている。

### 4) 北本市自然委託調査について

北本市は、市史編さん室の事業として、『北本市自然委託調査』を1990年にスタートした。この



計画は、北本市の自然環境を、動物・植物の両面についてより詳しく調査することを目的としており、市川和夫氏をこの調査の総責任者とし、以下の分野（調査員）の調査が進行中である。

『哺乳類（斎藤貴）』『鳥類（島田勉）』『爬虫類・両生類（関口いずみ）』『魚類（金沢光）』『軟体動物（川名美佐男）』『膜翅目（南部敏明）』『双翅目（原勝司）』『鱗翅目（市川和夫）』『トンボ目・半翅目（碓井徹）』『直翅目（内田正吉）』『昆虫全般（牧林功）』『水生昆虫類（大熊光治）』『水湿生植物（ト澤美久）』『陸生植物（細田浩）』。

なお、同市史編さん室では、1993年から1994年にこの調査の結果をまとめ、すべての調査データを含む内容の出版物を刊行する予定とのことである。

### 3. 北本市石戸宿のトンボ相について

筆者は、1985年におこなわれた埼玉昆虫談話会による北本市石戸宿の昆虫類調査で得られた26種のトンボ類を記録したが（碓井、1986）、その後の筆者を含む会員の調査により、10種を越える種が当地から新たに記録された。本項では、それらの知見を整理し、当地のトンボ相についてまとめてみたい。

なお、各科の右に数字は、例えば“4種[4 = 3 + 1]”とあれば、碓井（1986）により記録された種数が3種、その後の調査で追加された種が1種で、これまでに4種が当地から記録されたことを示す。

#### イトトンボ科 4種[4 = 4 + 0]

碓井（1986）は、キイトトンボ・アジアイトトンボ・クロイトトンボ・オオイトトンボを記録したが、その後本科の追加種はない。そのうち、キイトトンボは、この数年間は目撃されておらず、当地からは姿を消してしまった可能性が高い。その原因は定かではないが、本種が確認されていた一夜堤の南部の湿地（児童公園と当地を連絡する木橋の北側）が、この数年間、乾燥化が進んでいることが原因かもしれない。

また、セスジイトトンボが、桜堤内側の釣り堀になっている荒川の旧流路で発見される可能性はあろう。

#### アオイトトンボ科 2種[2 = 2 + 0]

碓井（1986）は、ホソミオツネトンボ・オオアオイトトンボの2種を記録したが、その後本科の追加種はない。この他に、オツネトンボとアオイトトンボの目撃記録が寄せられているが（未発表）、若干不確実な目撃例なので現時点では記録にとどめない。

#### カワトンボ科 1種[1 = 1 + 0]

碓井（1986）は、ハグロトンボ1種を記録したが、その後本科の追加種はない。本種は、特に荒川本流の川岸に多く見られ、農事試験場跡地で見られる個体数は少ない。

#### サナエトンボ科 5種[5 = 1 + 4]

碓井（1986）は、ナゴヤサナエ1種のみを記録したが、その後、森（1987）はホンサナエを、高橋（1990）はアオサナエを、磯野（1991a）はコオニヤンマをそれぞれ当地から記録した。ホンサ

ナエとアオサナエは、その後の記録はないが、コオニヤンマは、荒川本流の川岸で羽化殻も採集されており(未発表)、成虫は磯野(1991a)の記録以外にも観察例がある。また、ウチワヤンマは、1990年と1991年に、旧流路の釣り堀で複数個体が観察されている(未発表)。

なお、成虫の産卵場所などが話題になっているナゴヤサナエであるが、当地での産卵行動や羽化の生態などは未観察である。

また、今後も、ミヤマサナエのような、荒川本流をヤゴがかなり流下すると考えられる種については、当地で採集される可能性があると思える。

#### オニヤンマ科 1種[1 = 1 + 0]

本科のトンボは、関東地方ではオニヤンマ1種であり、碓井(1986)によるオニヤンマの記録以外に新たに本科のトンボが追加される可能性はほとんどない。

#### ヤンマ科 9種[9 = 4 + 5]

碓井(1986)は、サラサヤンマ・アオヤンマ・ギンヤンマ・クロスジギンヤンマの4種を記録したが、碓井(1988, 1991)はネアカヨシヤンマとカトリヤンマを、三宮(1991a)はオオギンヤンマを、磯野(1991a, 1991b)はマルタンヤンマとヤブヤンマをそれぞれ当地から記録した。南方からの飛来種と考えられるオオギンヤンマを除くと、大宮台地に生息する可能性のあるヤンマ類はこの8種でほぼ出揃ったものと考えられる。

#### ヤマトンボ科 2種[2 = 1 + 1]

碓井(1986)はコヤマトンボのみを記録したが、1990年と1991年に、旧流路の釣り堀でオオヤマトンボが観察されており(未発表)、これで、当地に産する本科のトンボは2種になる。

#### トンボ科 17種[17 = 12 + 5]

碓井(1986)はハラビロトンボ・シオカラトンボ・シオヤトンボ・オオシオカラトンボ・ヨツボシトンボ・ショウジョウトンボ・アキアカネ・ナツアカネ・ヒメアカネ・ノシメトンボ・コシアキトンボ・ウスバキトンボの12種を記録した。その後の調査で、マユタテアカネが当地に産する事があきらかになり(未発表)、最近になって、三宮(1991b)はコノシメトンボを、磯野(1991b)はマイコアカネを当地から記録し、これでアカネ属だけで7種が記録されたことになる。いまだに記録はないが、リスアカネの生息も期待される。

この他に、未発表ながらコフキトンボとチョウトンボの観察例が複数ずつある。

以上が、これまでにあきらかになった北本市石戸宿のトンボ相であるが、都市近郊部においてこれだけの種数のトンボが、わずか30~40万m<sup>2</sup>程度の範囲で見られる環境は、極めて珍しいといえよう。これは、当地が、植生豊かな湿地、開放水面を有する止水域、荒川本流や湿地を流れる水路などの大小の流水域といった、多様にして良好な水域環境を保全している証拠にはかならず、この水域環境を改変し

てしまえば、トンボ相は急速に貧弱なものに変化していくことは容易に考えられる。その意味でも、すでに工事が開始されている『県立北本自然観察公園』の整備事業では、このトンボの楽園を破壊するような環境改変は何としても謹んでほしいと願っている。

#### 4. 広義の調査地名『石戸宿』の提案

1986年の当会による調査では、荒川堤防の東側の、主に農事試験場跡地を調査対象区域としており、その地名を『石戸宿』としていた。しかし、前述したように、湿地と雑木林を中心とする農事試験場跡地の西には、堤防を隔てて、荒川本流や、ほぼ止水域になっている大きな開放水面を持つ旧流路、そしてヤナギ類を主とする灌木地帯が存在し、それぞれの環境に見られる昆虫相が少しずつ異なっている上に、各種昆虫類の成虫が堤防の内外を移動することがしばしば観察されている。

それらの事を考え合わせると、当地の自然環境を把握する際、農事試験場跡地を独立したものととらえるのではなく、西は荒川本流、東は『北里メディカルセンター』東側の雑木林まで、そして南北は『北本市自然遊歩道』に接する雑木林や草地で囲まれた一帯を一続きの生態系として考え、同一地域の調査として扱うことを提案したい。

また、この地での調査はできる限り『石戸宿』という地名を使う事も提案したいと思う。わざわざこうして提案するまでもなく、筆者以外でも、これまでの調査で得られた標本等には、採集地点が堤防の内側や現在『北里メディカルセンター』の地内になっている台地上部のものもすべて『石戸宿』として多いと思われるが、実際には、この一帯は行政区分上の土地境界が複雑で、北本市都市計画図(1/2,500)を見ても、“石戸宿”の他に、“荒井”“高尾”“下石戸上”といった大字名が細かく入り乱れている地域であることがわかる。今後の調査において、採集地点の大字名をその都度正確に特定することは現実的ではないと思われる上、今後、当地域の調査結果をまとめていく上で混乱を来さないためにも、『石戸宿』という地名を広義の調査地名として用いたいと思う。

また、当地は上記のような土地の境界の問題だけでなく、地名の呼び方についてもなかなか複雑な問題を持っているので、ここで少し整理しておきたい。

まず、『石戸宿』という地名は、当会が1985年に調査を開始する際、調査計画の打ち合わせの段階から『いしどじゅく ; Ishidojuku』と呼んでおり、調査に参加した会員の間でもこの呼び方が一般的になっていた。また、竹内(1986)でも、『Ⅱ 調査地の概説』の冒頭に、『埼玉県北本市石戸宿(いしどじゅく)農林省農事試験場跡地およびその周辺』と、その呼び方を意図的に付記していることもあって、少なくとも筆者は、1989年までは何の疑問も持たずに、この地に『いしどじゅく』という呼び方を使っていた。ところが、前述の“北本市自然委託調査”が始まる段階で、同市市史編さん室と調査方法などについて打ち合わせをおこなった折、当地の地名が地元の人々の間でも、『いしどじゅく』『いしとしゅく』『いしとじゅく』などと、何通りかの呼び方が使われていることを知った。これでは、当地で得られた標本に英文ラベルを付ける場合にローマ字表記の綴りで悩むこととなり、なんとか統一できないものかと考えていたが、結論がでないまま今に至ってしまった。

本報文を書くにあたって、この地名の呼び方の問題は避けて通れないので、市史編さん室に問い合わせたところ、この地名を『いしとしゅく ; Ishitoshuku』と読むことを、市当局がしばらく前に決定した、ということを知られた。この決定は、行政レベルでは問題ないであろうが、これまで『い

しどじゅく』という呼び方を用いてきた当会の会員等には、混乱を残すことになった。参考までに、全国の地名一覧などが掲載されている出版物を調べてみると、金井(1981)では、当地の呼び方は『いしとじゅく ; Ishitojuku』であるが、現時点で最新の資料と思われる“新日本文献地図 (平成4年度版)”では、『いしとしゅく ; Ishitoshuku』になっている。

この問題をどう扱うかは、各人の考えがあるであろうが、筆者としては、今後も自然環境にかかわる調査報告などについては、前述したような広い範囲を包括する地名として『いしどじゅく ; Ishidojuku』をこれまで同様に用いることにする。これは、竹内(1986)が『いしどじゅく』と平仮名表記を提示していること、林・碓井(1990)で採集地名が“北本市石戸宿 (Ishidojuku, Kitamoto)”と標記されていること、林・碓井(1991)の英文サマリーのタイトルが、“Rhynchota (Insecta) from Ishidojuku, Kitamoto City, Saitama Prefecture”であること、そして、これらの調査で得られた多数の標本類に“Ishidojuku”というラベルがすでに付けられており、もし、今後『いしとしゅく』を用いるとなると、同一地で得られた標本に“Ishidojuku”と“Ishitoshuku”という異なる表記のラベルが混在して混乱を招いてしまう可能性が高いこと、などが『いしどじゅく』を用い続ける根拠である。

今後の当地での昆虫類調査などで不要な混乱を避けるためにも、広義の『石戸宿 (いしどじゅく)』という地名を用いることを、出来る限り多くの方々にご賛同いただきたいと思います。

## 5. 県立『北本自然観察公園』に関して

ページも残り少ないので、今回は簡単に触れるに止めるが、当地に開設される同公園については、いくつか提言がある。同公園の詳細な計画は現時点では把握していないので、具体的な指摘はできないものの、これまで知り得た、あるいは調査し得た範囲で以下のことを述べておきたい。

### ① 広大な開放水面を持つ池の造成は、絶対におこなうべきでない。

同公園の整備計画の中に、石戸宿中央部の低湿地に広大な池を造成する計画があるらしいが、すでに、これまでのいくつかの項で述べたように、北本市石戸宿の自然環境として、その多様にして良好な水域環境の重要性を認識し、そこには安易に手を加えるべきではない、と考える。

多様な水域環境を潰して“見栄えの良い”池を造成することは、多様な生物相を育てている雑木林と草地を潰して“美しい”ゴルフ場を造成するのと大差のない開発である。『自然観察公園』と名乗るのならば、何が本当の“自然”なのかをしっかりと認識してほしいと思う。

当地の貴重な湿性環境を破壊して大きな開放水面を持つ池を掘り、そこに飛来するカモ類などを観察するのが同公園のコンセプトであるならば、筆者は、重要な自然環境を破壊して人工的な自然風味の環境を見せる同公園を『自然破壊観察公園』とでも名付けたいとすら考える。

再度述べるが、当地に今後残すべき湿性環境は、現在残されている湿性環境のすべてであり、造成した池の周りに間に合わせ程度の湿地を残しても、それは湿性環境を保全したことにはまったくならない、といっても過言ではない。

### ② 現在の水域環境保全のために、特に当地の乾燥化を防ぐ対策を早急に講じるべきである。

前項と裏表の関係にあるようなことだが、数年前に比べ、明らかに石戸宿の乾燥化は進行している。湿性環境を潰して大きな池を掘ることは大反対であるが、湧水によって湿地が形成される環境を保全し、当地の乾燥化を防ぐ対策は絶対に必要であると考ええる。

③ 『自然観察公園』の名の元に、動植物を採集禁止にするのは反対である。

“採集禁止”が同公園の構想にあるのか否かはわからないが、いい加減な“自然保護”思想が独り歩きしている現代の風潮を考えてみれば、この公園の中を“動植物採集禁止”にする可能性は否定できない。しかし、ここを訪れる子供達が、野草や昆虫を実際に手にすることなく、ただ眺めながら図鑑と見比べてカタログ的な知識を頭に詰め込んでも、それは『正しい自然観』の学習にはほとんど役に立たないと筆者は考える。小ぎれいな服装で、“手足を汚さずに自然を眺めて楽しむ”という発想は、『生命の質感』を自らの五感で実感しない、かなり歪んだ自然観を植え付けてしまう危険性を持っていると思う。この自然観察公園は、ぜひ子供達が自分の手で『生命の質感』を実感できるようなコンセプトをもってほしいと願っている。

この『北本自然観察公園』と当地の自然環境との関係については、寄せ蛾記64号掲載予定の次回でより詳細に論じたい。今はただ、同公園が『自然破壊観察公園』にならないことを祈るばかりである。

〔引用・参考文献〕

- 阿部光典・笹井厚子, 1986. 北本市石戸宿の甲虫類. 寄せ蛾記, (48):691-713.
- 阿部 光典, 1990. 埼玉県産ゲンゴロウ類の記録. 寄せ蛾記, (56):1024-1025.
- 上尾高校生物部, 1986. 北本市石戸宿における蝶類成虫の発生消長について. 寄せ蛾記, (48):745-750.
- , 1988. 北本市石戸宿におけるツマグロキチョウの記録. 寄せ蛾記, (51):896.
- 林 正美, 1986. 北本市石戸宿の半し類. 寄せ蛾記, (48):742.
- , 1990. 日本産セミの分布調査報告(2) —ハルゼミ属, ヒメハルゼミ属, ヒグラシ属, タイワンヒグラシ属, ミンミンゼミ属—. Cicada (日本セミの会々報), 9:1-48.
- , 1991. 日本産セミの分布調査報告(3) —ニイニイゼミ属, ケナガニイニイゼミ属, クマゼミ属—. Cicada, 10:1-32.
- 林 正美・碓井 徹, 1990. 埼玉県におけるアメンボ4種の記録. Rostria, (40):657-661.
- ・———, 1991. 北本市石戸宿の半翅類相. 埼玉大学紀要教育学部(数学・自然科学), 40(2):7-22.
- 市川 和夫, 1986. 北本市石戸宿の蛾類. 寄せ蛾記, (48):724-739.
- 市川和夫・利根川雅実, 1988. 暖冬の1988年1月における蛾の観察例. 寄せ蛾記, (51):887.
- 磯野 治司, 1991a. 北本市石戸宿における注目すべきトンボ類. 寄せ蛾記, (58):1088-1089.
- , 1991b. 北本市石戸宿でマイコアカネを採集. 寄せ蛾記, (61):1179.
- , 1991c. 北本市石戸宿でヤブヤンマを採集. 寄せ蛾記, (61):1179.

- , 1991d. 北本市石戸宿における蝶2種の記録. 寄せ蛾記, (61):1180.
- 金井 弘夫, 1981. 日本地名索引. 653+1566+16pp. (3分冊). アブック社, 鎌倉.
- 環境庁編, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータブック- (無脊椎動物編) 272pp. 日本野生生物研究センター, 東京.
- 北本市教育委員会市史編さん室, 1990. 北本市史, 第三卷上 (自然・原始資料編). 668pp., 20pls., 北本市.
- 森 博志, 1987. 北本市石戸宿でホンサナエを採集. 寄せ蛾記, (50):843.
- 中川 利勝, 1991. 浦和市大谷口のツマグロキチョウ. 寄せ蛾記, (58):1090-1091.
- 斉藤 章, 1988. 北本市石戸宿でミヤマセセリを採集. 寄せ蛾記, (52):929.
- 斉藤 章・島崎桂太, 1987. 北本市石戸宿のウラナミアカシジミ. 寄せ蛾記, (50):843.
- 斉藤 清, 1991. 北本市石戸宿にてクハコノマチョウを採集. 寄せ蛾記, (61):1180.
- 三宮 幸雄, 1991a. 北本市石戸宿でオオギンヤンマを採集. 寄せ蛾記, (61):1178.
- , 1991b. 北本市石戸宿でコノシメトンボを採集. 寄せ蛾記, (61):1178.
- 佐藤 憲二, 1987. 北本市石戸宿におけるチャバネセセリの記録. 寄せ蛾記, (50):842.
- 佐藤 光一, 1988. 栃木県におけるエサキアメンボの分布と生息地について. 栃木県立博物館研究紀要, (5):19-22.
- 巢瀬 司, 1986. 北本市石戸宿の虫えい. 寄せ蛾記, (48):743-744.
- 立川 周二, 1985. エサキアメンボは絶滅するか -その分布と生息地から-. Rostria, (37):521-525.
- 高橋 衛, 1990. 北本市石戸宿におけるアオサナエの記録. 寄せ蛾記, (56):1037.
- 玉木 長寿, 1986. 北本市石戸宿の双し類. 寄せ蛾記, (48):714-716.
- 内田 正吉, 1991a. 埼玉県のヒシバツタ類. バツタリギス, (88):9-18.
- , 1991b. 北本市自然委託調査 直翅類 中間報告. (未発行).
- 上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝, 1985. 原色日本甲虫図鑑. II : 183-201, pls. 33-36. 保育社, 大阪.
- 碓井 徹, 1986. 北本市石戸宿のトンボ類. 寄せ蛾記, (48):740-741.
- , 1988a. 北本市石戸宿でネアカヨシヤンマを採集. 寄せ蛾記, (51):896.
- , 1988b. 北本市石戸宿でクマゼミの声を聞く. 寄せ蛾記, (51):898.
- , 1988c. 北本市石戸宿でジャコウアゲハを採集. 寄せ蛾記, (52):929.
- , 1991a. 北本市石戸宿でカトリヤンマを採集. 寄せ蛾記, (58):1087.
- , 1991b. 北本市石戸宿におけるクロコノマチョウの採集例. 寄せ蛾記, (61):1180.
- 山崎 正則, 1986. 北本市石戸宿の蝶類. 寄せ蛾記, (48):717-723.

## 埼玉県産蝶類記録 (2)

中川 利勝

筆者は、1981年から1990年までの埼玉県内の蝶類採集記録(目撃記録を含む)を整理したので、報告する。尚、本報文の記録の扱いについては、中川(1991a)と同様、筆者自身の明確な記載のある記録(目撃記録を含む)、および現存する標本データのみを採用し、不確実な記録は一切省いてある。

### ◎ セセリチョウ科

ダイミョウセセリ	7. VIII. 1990	川口市小谷場	1蛹4幼 (3exs.羽化)
ヒメキマダラセセリ	13. VI. 1989	秩父郡皆野町蓑山	5♂♂4♀♀ (第1化個体)
キマダラセセリ	6. IX. 1990	川口市小谷場	1ex. (第2化個体)
ギンイチモンジセセリ	23. IV. 1987	浦和市秋ヶ瀬	16exs. (第1化個体)
	31. VIII. 1988	浦和市秋ヶ瀬	1♀ (第3化個体)
イチモンジセセリ	22. IX. 1990	浦和市大谷口	5♂♂2♀♀
	24. IX. 1990	浦和市大谷口	6exs.
オオチャバネセセリ	21. IX. 1990	川口市小谷場	1exs.
ミヤマチャバネセセリ	23. IV. 1987	浦和市秋ヶ瀬	12exs. (第1化個体)
	22. IV. 1990	浦和市大谷口	1♂1♀ (第2化個体)
チャバネセセリ	21. IX. 1990	浦和市大谷口	1♂
	24. IX. 1990	浦和市大谷口	4♂♂
	5. X. 1990	浦和市大谷口	1♂
	11. X. 1990	浦和市大谷口	2♂♂
	12. X. 1990	浦和市大谷口	1♂
	14. X. 1990	本庄市下仁手	1♂
	7. XI. 1990	戸田市下笹目	1♀

### ◎ アゲハチョウ科

アオスジアゲハ	20. IX. 1988	蕨市北町	28幼
アゲハ	25. IX. 1988	蕨市中央	10幼
	2. X. 1988	蕨市中央	1幼
	4. X. 1988	蕨市中央	4幼
	6. X. 1988	蕨市中央	5幼
キアゲハ	3. X. 1988	北本市石戸宿	16幼
クロアゲハ	26. VI. 1985	浦和市大谷口	1♂
	25. IX. 1988	蕨市中央	9幼
モンキアゲハ	夏 1988	浦和市大崎	1ex. 目撃
	13. VI. 1989	秩父郡皆野町蓑山	2♂♂

カラスアゲハ	6. X. 1988	蕨市中央	2幼 (2♂♂羽化)
ミヤマカラスアゲハ	13. VI. 1989	秩父郡皆野町蓑山	2♂♂
ジャコウアゲハ	31. VII. 1990	所沢市堀之内	1♂
	31. VII. 1990	所沢市堀之内	1♂目撃

## ◎シロチョウ科

ツマキチョウ	11. IV. 1989	浦和市秋ヶ瀬	1♂
キチョウ	31. VIII. 1988	浦和市秋ヶ瀬	3♂♂
	1. X. 1988	比企郡吉見町黒岩	3♂♂
	2. X. 1988	浦和市秋ヶ瀬	5♂♂3♀♀
	3. X. 1988	北本市石戸宿	1♂
	6. VI. 1989	浦和市秋ヶ瀬	1♂1♀
ツマグロキチョウ	3. X. 1988	北本市石戸宿	2♂♂3♀♀
	21. IX. 1990	浦和市大谷口	1♂ 中川(1991b)を参照.
	14. X. 1990	北本市石戸宿	1♀
モンキチョウ	3. X. 1988	北本市石戸宿	1♂
	5. X. 1990	浦和市円正寺	1♂
	11. X. 1990	浦和市大谷口	1♀
	7. XI. 1990	戸田市下笹目	19幼19卵

## ◎シジミチョウ科

ムラサキシジミ	31. VII. 1990	所沢市堀之内	1♂目撃
	21. IX. 1990	川口市小谷場	1♂ 中川(1991c)を参照.
ミズイロオナガシジミ	23. VI. 1985	浦和市井沼方	1ex.
	26. VI. 1985	浦和市井沼方	1ex.
	5. VI. 1987	浦和市秋ヶ瀬	4exs.
	12. VI. 1987	浦和市秋ヶ瀬	3exs.
	6. VI. 1989	浦和市秋ヶ瀬	3exs.
ミドリシジミ	23. VI. 1985	浦和市井沼方	1♂
	26. VI. 1985	浦和市井沼方	1♂2♀♀ (♀はB型 1ex. O型 1ex.)
	23. IV. 1987	浦和市秋ヶ瀬	8幼(2♂2♀羽化, ♀はB型 1ex. O型 1ex.)
	7. V. 1987	浦和市秋ヶ瀬	8幼 (3♂3♀羽化, ♀はO型のみ)
	13. V. 1987	浦和市秋ヶ瀬	7幼 (3♀羽化, ♀はB型 1ex. O型 2ex.)
	5. VI. 1987	浦和市秋ヶ瀬	1♂
	12. VI. 1987	浦和市秋ヶ瀬	13♂♂3♀♀ (♀はB型 2ex. O型 1ex.)
	16. V. 1989	浦和市秋ヶ瀬	16幼 (3♂9♀羽化)
	6. VI. 1989	浦和市秋ヶ瀬	3♂♂
ベニシジミ	23. IV. 1987	浦和市秋ヶ瀬	7exs.
	21. IX. 1990	川口市小谷場	1ex.
	22. IX. 1990	浦和市大谷口	2exs.
	14. X. 1990	本庄市下仁手	1ex.



ウラナミシジミ	24. IX. 1990	浦和市大谷口	1 ♀
	1. X. 1990	浦和市大谷口	3 ♀ ♀
	12. X. 1990	浦和市大谷口	1 ♂
ツバメシジミ	21. IX. 1990	浦和市大谷口	4 ♂ ♂ 4 ♀ ♀
	22. IX. 1990	浦和市大谷口	4 ♂ ♂ 1 ♀
ゴイシシジミ	26. VI. 1985	浦和市井沼方	1 ♂ 1 ♀
	31. VII. 1990	所沢市堀之内	1 ♂ 1 ♀
ルリシジミ	22. IX. 1990	浦和市大谷口	1 ♀
	1. X. 1990	浦和市大谷口	1 ♂
ミヤマシジミ	10. VII. 1987	本庄市下仁手	10 ♂ ♂ 5 ♀ ♀
	14. IX. 1987	本庄市下仁手	10 ♂ ♂ 4 ♀ ♀
	14. X. 1990	本庄市下仁手	4 ♀ ♀ 目撃

## ◎ウラギンシジミ科

ウラギンシジミ	12. VI. 1987	浦和市秋ヶ瀬	1 ♀ 目撃
	31. VIII. 1988	浦和市秋ヶ瀬	2 ♂ ♂
	10. X. 1988	北本市石戸宿	1 ♂
	27. VI. 1989	浦和市秋ヶ瀬	1 ♀
	22. IX. 1990	浦和市大谷口	1 ♀
	25. XI. 1990	蕨市中央	1 ♀ 目撃

## ◎テングチョウ科

テングチョウ	26. VI. 1985	浦和市大谷口	1 ex. 目撃
	5. VI. 1987	浦和市秋ヶ瀬	1 ex. 目撃
	13. VI. 1989	秩父郡皆野町蓑山	1 ♂ 1 ♀
	2. VI. 1990	浦和市秋ヶ瀬	1 ♀
	19. VII. 1990	浦和市秋ヶ瀬	1 ♂
	23. VII. 1990	浦和市秋ヶ瀬	1 ex. 目撃

## ◎タテハチョウ科

クモガタヒョウモン	13. VI. 1989	秩父郡皆野町蓑山	2 ♂ ♂
ウラギンヒョウモン	13. VI. 1989	秩父郡皆野町蓑山	4 ♂ ♂
イチモンジチョウ	31. VIII. 1988	浦和市秋ヶ瀬	1 ♂ (極小個体)
キタテハ	1. X. 1988	比企郡吉見町黒岩	1 ex.
	3. X. 1988	北本市石戸宿	1 ♀
	12. X. 1990	浦和市大谷口	1 ex.
アカタテハ	13. VI. 1989	秩父郡皆野町蓑山	1 ex.
ヒメアカタテハ	10. VII. 1987	本庄市下仁手	2 ♂ ♂ 2 ♀ ♀
	22. IX. 1990	浦和市大谷口	3 exs.
	1. X. 1990	浦和市大谷口	1 ex.
	12. X. 1990	浦和市大谷口	1 ♀
	14. X. 1990	北本市下石戸下	1 ex.

	31. X. 1990	浦和市円正寺	1♀
	31. X. 1990	浦和市大谷口	1♂
	7. XI. 1990	戸田市下笹目	1ex. 目撃
ルリタテハ	26. VI. 1985	浦和市井沼方	2exs.
	8. VIII. 1990	浦和市南浦和	1ex.
ヒオドシチョウ	23. VI. 1985	浦和市大谷口	1ex.
	26. VI. 1985	浦和市大谷口	1ex.
	5. VI. 1987	浦和市井沼方	1ex. 目撃
コムラサキ	5. VI. 1987	浦和市秋ヶ瀬	1♂
	13. VI. 1988	浦和市秋ヶ瀬	1♂ 目撃
	6. VI. 1989	浦和市秋ヶ瀬	2♀ ♀
	5. VII. 1990	浦和市秋ヶ瀬	1♂
	2. VIII. 1990	浦和市大崎	1♀
ゴマダラチョウ	31. VIII. 1988	浦和市秋ヶ瀬	2♂♂
	4. IX. 1988	浦和市秋ヶ瀬	1♂
	9. IX. 1988	浦和市秋ヶ瀬	2♂♂ 1♀
	27. VII. 1990	浦和市大崎	2♂♂ 1♀
	24. XI. 1990	浦和市大崎	5幼
オオムラサキ	31. VII. 1990	所沢市勝楽寺	1♂

◎ ジャノメチョウ科

コジャノメ	31. VII. 1990	所沢市堀之内	1♂
ヒメジャノメ	6. VI. 1989	浦和市秋ヶ瀬	1♀
ヒカゲチョウ	31. VIII. 1988	浦和市秋ヶ瀬	5♂♂

[参考文献]

- 中川利勝(1991a) 埼玉県産蝶類記録 (1), 寄せ蛾記(58) : 1078-1079.  
 —— (1991b) 浦和市大谷口のツマグロキチョウ, 寄せ蛾記(58) : 1090-1091.  
 —— (1991c) 川口市小谷場のムラサキシジミ訪花例, 寄せ蛾記(58) : 1091.

(なかがわとしかつ ㊟335 蕨市北町 1-13-10)

— 訂正 —

中川利勝 : 埼玉県産蝶類記録 (1) (寄せ蛾記58号 1078-1079) に, 以下の訂正があります.

1. キアゲハ 20. VI. 1973 皆野町蓑山 8exs. を → 20. VI. 1976に
2. モンキアゲハ 20. VI. 1973 皆野町蓑山 2exs. 目撃を → 20. VI. 1976に
3. モンシロチョウ 18. IV. 1971 浦和市大谷口 2♀5♂を削除して  
 → 31. III. 1971 浦和市大谷口 1♀2♂に
4. モンシロチョウ 28. III. 1973 浦和市大谷口 1♀3♂を  
 → 25. III. 1973 浦和市大谷口 2♀10♂に

(なかがわとしかつ ㊟335 蕨市北町 1-13-10)

## 所沢市三ヶ島の甲虫類 (追加記録)

薮倉 正人

.....

狭山丘陵の一角である当地の昆虫相については、「寄せ蛾記」Supplement 2 (1984)に既にまとめられている。筆者は、1991年の採集品の中から、この報文に記録されていない甲虫類を報告しておく。

いずれも、早大キャンパスの南西の谷の湿地帯と、それを囲む森林内で得られたものである。当地は、1984年に比べて縮小したものの、都市近郊としてはすばらしい自然環境がまだ残っており、より深い調査が期待される。

発表にあたって種々のご教示を頂いた、神奈川昆虫談話会の林長閑・高橋和弘両氏、ならびに京都の水野弘造氏に感謝する。

- コアオハナムグリ *Oxycetonia jucunda* (FALDERMANN) 1ex. 6. X  
 クロハナムグリ *Glycyphana fulvistemma* MOTSCHULSKY 1ex. 19. V  
 ニセヒメジョウカイ *Athemus lineatipennis* WITTMER 1ex. 1. V  
 高橋和弘氏同定所蔵 (写真1)。

- セスジジョウカイに近似の一種 *Athemus* sp. 1ex. 12. V  
 早春平地の谷戸などの湿地に出現する未記載種。上翅の色彩に個体変化があり、黒い筋を持つものから、黒色部が消失し、完全に黄褐色になるもの (写真2) までいるという。

- スジグロボタル *Pristolycus sagulatus* GORHAM 1ex. 9. VI  
 埼玉県未記録 (写真4)。神奈川県では、箱根仙石原で記録されていたが (大場, 1981), 最近になって、横浜・川崎市内の丘陵地の谷戸に、局地的に生息していることが明らかになった。筆者も、本種の多産地である川崎市生田産の標本を所持している (1♂, 26. V. 1991, 筆者採集)。林 (1991) によれば、産卵はコケに行われ、幼虫はカワニナを捕食するという。所沢の個体は、葉上どころがっていた死後まもない♀で、かなり汚損している。埼玉でも今後各地で採集されるであろう。

- ウスキホシテントウ *Oenopia hirayamai* (YUASA) 1ex. 1. V  
 クロチビヒラタホソナガクチキ (仮称) *Phloeotrya* ? sp. 1ex. 1. V  
 水野弘造氏同定所蔵。低山地性の未記載種。表日本の福島県から東海・近畿を通り、岡山あたりまで分布しており、暖帯林沿いに生息しているという (写真5)。

ツマグロハナカミキリ *Leptura modicenotata* PIC 1ex. 12. V

従来ヤツボシハナカミキリ (*L. arcuata*) の亜種とされてきたものであるが、とりあえず新しい扱い(楨原ら, 1991) に従っておく。当地ではノイバラの花によく来る。

シナノクロフカミキリ *Asaperda agapanthina* BATES 1ex. 12. V

スゲハムシ *Plateumaris sericea* (LINNE) 1ex. 1. V

湿地に生息するネクイハムシの一種である。すでに南 (1987) によって、ツヤネクイハムシと共に記録されている。

クロボシツツハムシ *Cryptocepharus signaticeps* BALY 1ex. 19. V

ヨツモンクロツツハムシ *Cryptocepharus nobilis* KRAATZ 1ex. 1. V

アオグロツヤハムシ *Oomorhoides nigrocaeruleus* (BALY) 1ex. 1. V

トビサルハムシ *Trichochrysea japana* (MOTSCHULSKY) 1ex. 1. V

ヨツボシハムシ *Paridea quadriplagiata* (BALY) 1ex. 9. VI

ヒメカメノコハムシ *Cassida piperata* HOPE 1ex. 9. VI

カオジロヒゲナガゾウムシ *Litocerus laxus* SHARP 1ex. 1. V

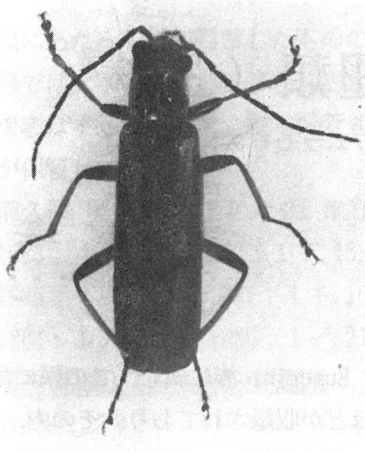
イチゴハナゾウムシ *Anthonomus bisignifer* SCHENKLING 1ex. 1. V

エゴシギゾウムシ *Curculio styracis* (ROELOFS) 1ex. 12. V

(写真3)

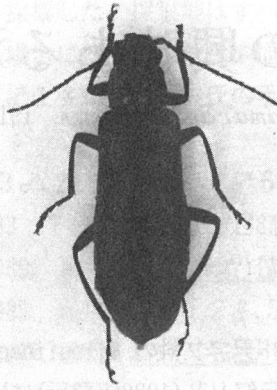
#### [参考文献]

- 藤多 文雄 (1988) 浦和市付近の甲虫類 (14). 昆虫と自然, 291 : 29-31.  
 後藤 好正 (1987) 横浜市の陸棲ホタルの分布. 神奈川自然保全研究会報告書, 6 : 2-5.  
 林 長閑 (1991) 川崎市域のホタル類とそれらの幼虫. 川崎市自然環境調査報告, II : 117-127.  
 楨原 寛ほか (1991) ヤツボシハナカミキリとツマグロハナカミキリ (2). Elytra, 19 (1) : 5-18.  
 南 雅之 (1987) 狭山湖, 多摩湖におけるネクイハムシ類の記録. Donaciiist, 1 : 23.  
 小田 博 (1984) 「埼玉県動物誌」に追加する甲虫類 (I). 寄せ蛾記, 42 : 541-545.  
 —— (1985) 「埼玉県動物誌」に追加する甲虫類 (II). 寄せ蛾記, 45 : 612-615.  
 大場 信義 (1981) 神奈川県 of ホタル類. 神奈川県昆虫調査報告書 : 405-408.  
 斎藤 良夫 (1978) 埼玉県の甲虫. 埼玉県動物誌 : 213-257.  
 埼玉昆虫談話会 (1984) 所沢市三ヶ島の昆虫類調査報告 (早稲田大学建設計画地の昆虫類緊急調査).



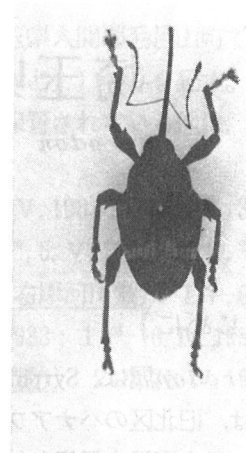
(写真1)

*Athemus lineatipennis*



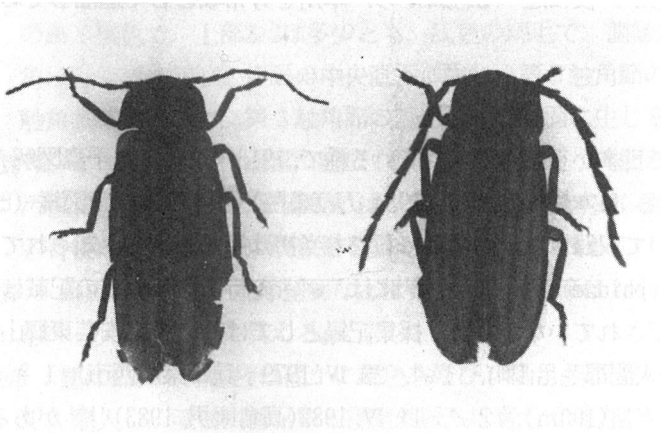
(写真2)

*Athemus* sp.



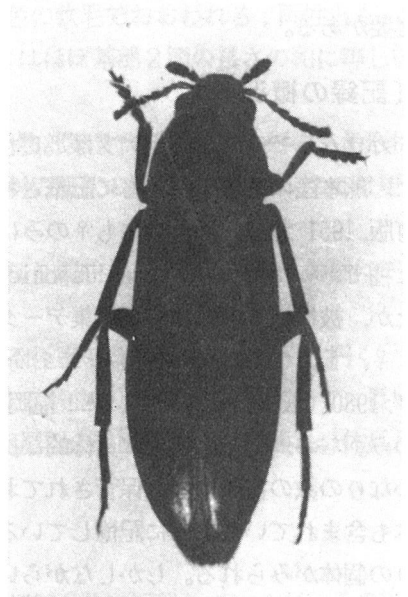
(写真3)

*Curculio styracis*



(写真4) *Pristolytus sagulatus*

左 所沢市三ヶ島産♀, 右 川崎市生田産♂ (参考)



(写真5) *Phloeotrya* ? sp.

(ひなくら まさと ☎ 336 浦和市大間木字宮前 1388-3 東浦和シティハイツ 201)

.....

## 埼玉県の興味ある双翅類 (3)

*Merodon kawamurae* MATSUMURA, 1916 カワムラモモフトハナアブ

玉木長寿

.....

〔はじめに〕

*Merodon*属は, Syrphidae ハナアブ科の Milesiinae 亜科, Eumerini 族に属し, この属に含まれる種は, 旧北区のハナアブ科の目録<sup>(1,3)</sup> (1988年発行)には93種ほどが収録されており, その内, 日本からは, 日本産昆虫目録(1989年発行)<sup>(2)</sup>にも, 標記の *kawamurae* MATSUMURA, 1916 カワムラモモフトハナアブと, *scutellaris* SHIRAKI, 1968 ナガモモフトハナアブの2種が挙げられている。

本報文では埼玉県におけるカワムラモモフトハナアブの知見について述べるが, 本種の学名に関しては, 日本産昆虫目録<sup>(2)</sup>と文献<sup>(1,3)</sup>の目録, 及び文献<sup>(1,2)</sup>では *kawamurai* を種小名として用いているが, 筆者は, 本報文では原記載に従い *Kawamurae* を用いる。また, 本種の分布域については, 前掲の2目録では九州のみが挙げられているが, 後に述べる経緯から, 本州を分布域として追加しておく必要がある。

〔記録の概況〕

カワムラモモフトハナアブは, これまで日本からのみ知られている種で, 1916年に新日本千蟲図解<sup>(8)</sup>に, 熊本産の♀標本をもとに記載された後, 日本昆虫大図鑑 (1934, 刀江書院)<sup>(9)</sup>, 日本昆虫図鑑 (改訂版, 1951 北隆館)<sup>(11)</sup>にも♀のみについて収録され, いずれにしても当初は熊本からのみ知られていた種であった。一方, Fauna Japonica Syrphidae III (1968)<sup>(12)</sup>には, ♂♀の特徴についての記載はあったが, 被検標本の具体的な採集データは記されていない。採集記録としては, 広島県安芸東郷山, 1♀, 5月(宮本正一, 1934)<sup>(10)</sup>; 埼玉県入間郡毛呂山町, 1♂, 22. IV. 1979; 兵庫県川西市, 1♀, 4. V. 1980 (玉木長寿, 1982)<sup>(16)</sup>; 福岡県香春岳(100m), 2♂, 11. IV. 1982(高倉康男, 1983)<sup>(15)</sup>があるのみ。なお, 上記のように具体的な採集記録は僅かしかないものの, 実際には, つくば市の農環研にはかなりの数の古い標本が保管されており, その中には, 埼玉県田島ヶ原や東京・赤羽のラベルのある標本も含まれていたように記憶している。本種はどこでもみられるという種ではないが, 生息地にはかなりの個体がみられる。しかしながらいずれにしても, 少ない種のひとつであろう。

これまで埼玉県の双翅類の目録として発表された, 埼玉県動物誌などの4報告<sup>(3,4,5,6)</sup>では未記録であったが, 筆者は前述の記録<sup>(16)</sup>を含めて, 埼玉県の毛呂山町から本種を次のように採集しているので, 埼玉県産ハナアブ科の追加種としてここに記録し, あわせて, その特徴や生息地発見までの経緯, 生態などについて触れてみたい。

## 〔採集データ〕

採集にあたっては、目撃したものの一部を採集した。採集地はすべて埼玉県入間郡毛呂山町で、以下の記録では大字名あるいは字名（必要のある場合には〔河川敷名や堤防名など〕）のみを記す。

採集者はすべて筆者で、標本保管者は、1♂1♀が木村輝夫氏の手許に保管されている他は、すべて筆者が保管している。

前久保（小蓋淵）<sup>こがたぶち</sup>：1♂, 22. IV. 1979；3♂, 24. IV. 1983；4♂6♀, 1. V. 1983；1♂11♀, 3. V. 1983；4♀, 4. V. 1983；1♀, 15. V. 1983；7♂1♀, 29. IV. 1984；1♂, 6. V. 1984；1♀, 3. V. 1985；2♂, 24. IV. 1988；1♀, 16. IV. 1989. 箕和田?（下耕地?）〔越辺川右岸河川敷〕：1♀, 6. V. 1984；1♂, 14. IV. 1985；1♂, 21. IV. 1985. 岩井（重殿）：2♀, 5. V. 1983；1♂, 16. IV. 1985. 岩井（鈴鹿）〔毛呂川右岸堤防〕：1♂, 21. IV. 1985. 岩井?〔毛呂川左岸堤防〕：2♂, 21. IV. 1985  
計25♂, 28♀.

## 〔形態的特徴〕

小型で、銅色光沢のある黒色種。

頭部：両複眼は、♂では若干の長さで相い接し、額はほとんど幅の1/2倍長。黄褐色の半月瘤直後の小さな光沢のある黒色部を除いて、密な帯白色軟毛でおおわれ、♀の複眼間は幅広く離れ、額は頭幅の約1/5倍幅；複眼はかなり長い淡色毛でおおわれる；♂の顔面は頭幅の1/3以下、かなり窪み、光沢のある黒色で、上部2/3は多少とも、灰色の綿毛で、側縁は淡色の軟毛でおおわれる；両性とも、触角は短く、額の前端、複眼の中央直下に生じ、第3触角節の長さはほぼ基部2節の長さの和に等しい；触角刺毛は裸体で、第3触角節の基部近くの背面に生じる。

胸部：♀の胸背には通常、幅広い黒色縦帯を具え；両性とも、腹部第2背板には、1対の三角形の汚橙黄色側斑、第3、4背板には、黄灰色の綿毛からなる各1対の弧状の横帯を具える；♀では更に各背板後縁には幅狭い淡色帯を具える。

脚：銅黒色で、膝、脛節基部などは帯褐色、後腿節は太く、かなり湾曲し、末端近くの下側面に三角形の一大板状突起を具える。

翅：翅は幅広で、翅膜は僅かに褐色を帯び、第4+5径脉は第5径室のほぼ中央で大きく、円く、深く、陥入し、亜端横脉（第5径室外縁）は著しく外方に向かって湾曲し、第5径室を閉じて、長い柄を具える；径-中横脉は中央室の中央直後に位置する；♂の交尾器の外観は写真13の通り。体長7-11mm（写真10~12）。

## 〔生息地発見までの経緯〕

本種の採集については、筆者はさきに「昆虫と自然」17(14), 1982<sup>(14)</sup>に記録しているが、その後も埼玉県に於ける本種の探索を続けていたところ、1983年4月24日、前回報告しておいた毛呂山町の採集地点（筆者の自宅のある団地裏の、徒歩数分の近距離にある雑木林の北側の林縁）から数m離れた木陰にあるヤマブキの花上より本種の3♂を採集した（A地点、写真1）。

このヤマブキの花期がほぼ終わった5月1日、同所を訪れてみたが、本種を発見することは出来なかった。あきらめて帰かけたが、思い直して、この林の反対側（南側）の明るい林縁をみて行こうと思

立ち、そちらに立ち寄ってみた。林の南側に廻ってみると、団地のすぐ裏に立つ高圧線鉄塔の傍らにあるカキドオシ等の繁茂する低い草むらの上を、黒褐色に輝く小型のハナアブが低く、水平に飛んでカキドオシの葉の上にとまった。採集してみると、本種の1♀であった。更にここで1♂を採集。同地点に本種がいることからみて、続く林縁にもいるかも知れないと考え、この鉄塔から大谷木川<sup>おおやぎがわ</sup>の方へ約100m近く、左側に続く林と右側の麦畑に挟まれた幅約2m程の草地も調査してみた。この草地は、カキドオシ、ムラサキサギゴケ、ヤハズエンドウなどを主とし、キツネノボタンやオヘビイチゴなども混じる、人の踏み跡のない荒れた草地（B地点、写真2）で、ここを調べてみると、・・・いるいる！次々と本種が黒い弾丸のように飛び出し、移動するのが見いだされた。現れる個体の大半は♀で、時折、一段小型の *Eumerus* 属（マドヒラタアブの仲間）の種も混ざって採集された。カワムラモモトハナアブの体色は概ね目立たない黒褐色であるが、その体色が地味であること、体がやや小形であったが故に、これまで、人の目をひくことが少なく、採集される機会も少なかったのかも知れない。しかしながら、眼が慣れてくると、胸背の銅色光沢によって、飛翔中でも注意してみればそれと見分けることができる。通常、本種が静止するときは、翅を重ね合わせてとまり、特有の後脚腿節下縁の三角形突起が目立つ。日光のよく当たるキツネノボタンやオヘビイチゴなどの黄色の花に好んで飛来するが、訪花個体のほとんどは黄色の花上で採集されており、どうやら、この種は黄色花を最も好むようである。ちなみに、筆者はゲンゲ（レンゲソウ）の紅紫色の花上では、本種をほとんど見たことがない。

5月3日、再びこの生息地（B地点）を訪れてみる。高圧線の鉄塔の下には、ヒガンバナやキツネノカミソリなどのヒガンバナ科ヒガンバナ属の植物がほぼ集中的に自生していた。ここで考えてみると、カワムラモモトハナアブは、スイセンなどの鱗茎を食害する *Merodon equestris* (FABRICIUS, 1794) スイセンハナアブ（ヨーロッパ・北アフリカに分布し、新北区にも移入された種で、日本にも1957年にオランダから輸入したスイセンより幼虫を飼育し、羽化させた例が知られている<sup>(1)</sup>）と同じ *Merodon* 属に属し、一方、スイセンは属こそ異なるが、ヒガンバナやキツネノカミソリなどと同じヒガンバナ科に属する植物である。そして、この鉄塔付近には、そのヒガンバナ科の植物が自生している。

筆者はここで、見えない糸を辿るような思いで、「事によると、このハナアブは、ヒガンバナやキツネノカミソリなどに寄生するのではなからうか？」という仮説を頭の中に描きはじめていた。しかしながら、このB地点のヒガンバナ科植物はほぼ鉄塔近くに集中しているが、カワムラモモトハナアブは、それらの群落の位置よりもはるかに離れた大谷木川の堤防近くまでその行動域を拡げており、その個体数も、鉄塔下の群落からのみ発生したものとみるのは、規模の点からも、何か不自然なように思われてならなかった。そして、大谷木川（左岸堤防）の方向に向かって左側に見える雑木林南縁の笹藪の根元あたりにも、このハナアブの姿が見えた。この藪に向かう林の中は、一体どうなっているのであろうか？。ここで、当然の疑問が湧いてきた。鉄塔から大谷木川の左岸堤防までの距離の約1/3ほどのところに、藪の中に潜り込むのに比較的都合の良さそうなところがあったので、多少の引掻き傷を覚悟のうえで、思い切って潜り込んでみた。

藪の入口は、雑木の枝や植物のつる、刺などが引っ掛かって潜り込むのにかなり困難であったが、顔にかかるクモの巣などを払い除けながら何とか潜り込んでみると・・・、驚いたことに、藪の中の林床は、ヒガンバナやキツネノカミソリなどのヒガンバナ科植物がビッシリと密生して葉を拡げている群落地帯で、それらの葉を避けて歩くには、足の踏み場もないほどであった。それらの群落地帯は、更に





写真1. カワムラモモフト  
ハナアブの生息地 (A点)。  
毛呂山町大字前久保 (小蓋  
淵) の雑木林 (北縁)。こ  
の地域での最初の1♂が採  
集された。



写真2. 生息地 (B点)。  
毛呂山町大字前久保 (小蓋  
淵)。左側は雑木林 (南縁)、  
右側は麦畑。その間の約2  
m幅の草地に多数の個体が  
現れた。左側の雑木林内に  
生息地の中心? C点・D点  
がある。



写真3. 生息地 (E点)。  
毛呂山町大字岩井 (重殿)。  
画面中央右寄りの休耕田と  
右上の越辺川堤防沿いにこ  
の種が発見された。

写真4. 生息地 (C点)。  
雑木林内、林床のヒガンバナ科植物 (ヒガンバナ・キツネノカミソリ) の群落。



図1. 生息地付近概念図。  
〔埼玉県入間郡毛呂山町  
前久保、岩井、箕和田 (越  
辺川河川敷右岸) 〕  
生息地 A~G。

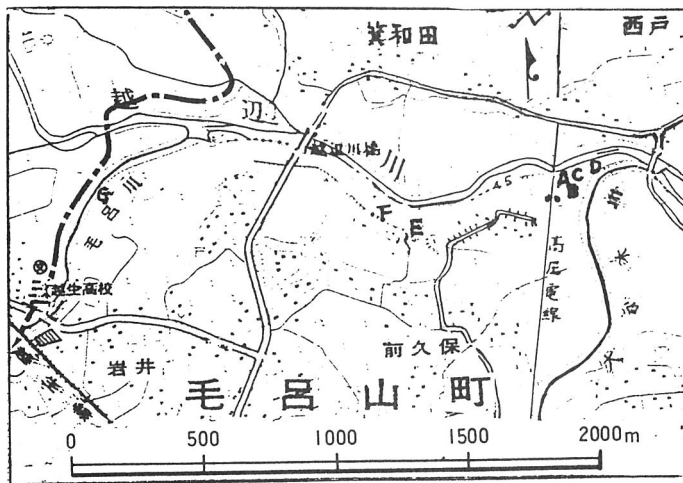
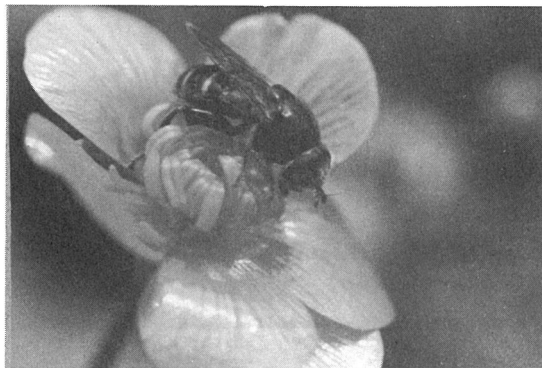


写真5. キツネノボタン花  
上のカワムラモモトハナ  
アブ ♀。  
(生息地B点. 3. V. 1984)



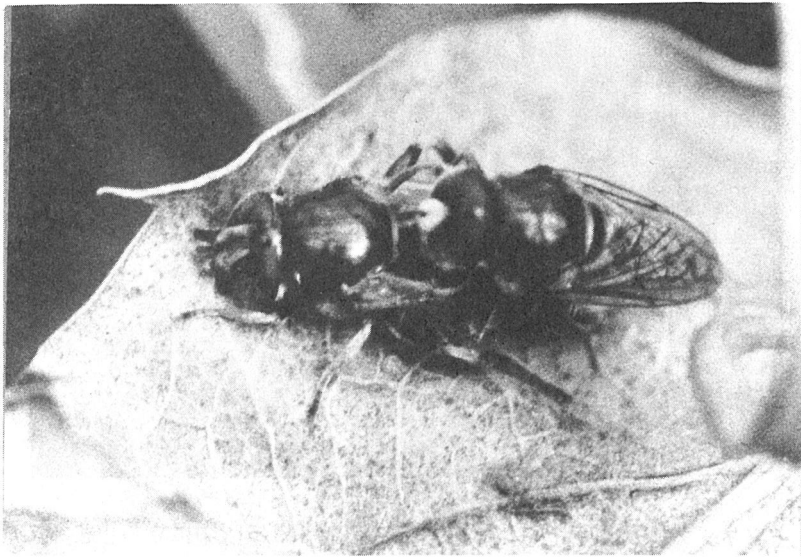


写真6. クヌギの落葉の上で交尾するカワムラモモブトハナアブ♂ (右上) と♀ (左下)



写真7. 産卵場所を探し求めて?キツネノカミソリ (ヒガンバナ科) の葉上を, 葉の基部に向かって歩行中のカワムラモモブトハナアブの♀。29. IV. 1984



写真8. キツネノカミソリ葉上を、葉の基部に向かって歩行中に立ち止まって腹部を曲げて尾端を葉面に向けて立てる♀。29. IV. 1984



写真9. 葉の基部を覆う落葉の下に潜り込んだ後、しばらくしてから、再び落葉の間から姿を現わす♀。

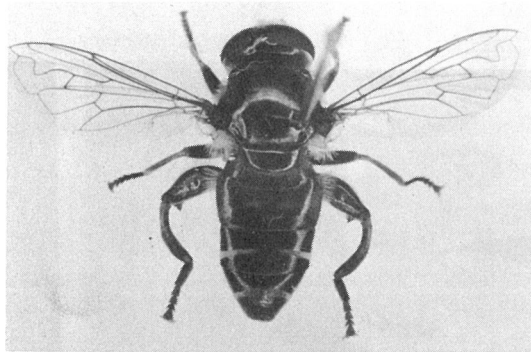


写真10. カワム  
ラモモトハナ  
アブ ♂  
毛呂山町大字前  
久保 (小蓋淵)  
24. IV. 1983

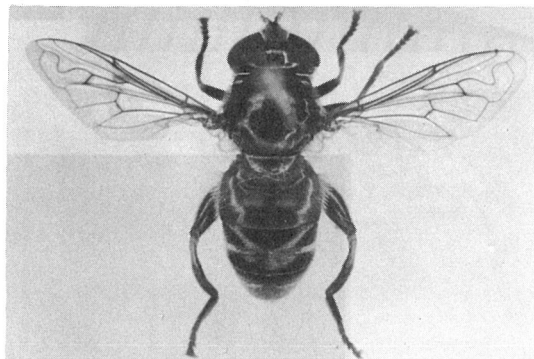


写真11. 同♀  
毛呂山町大字前  
久保 (小蓋淵)  
24. IV. 1983

写真12. ♂ 交尾器の拡大

C = cercus

S = surstyli

A = aedeagus

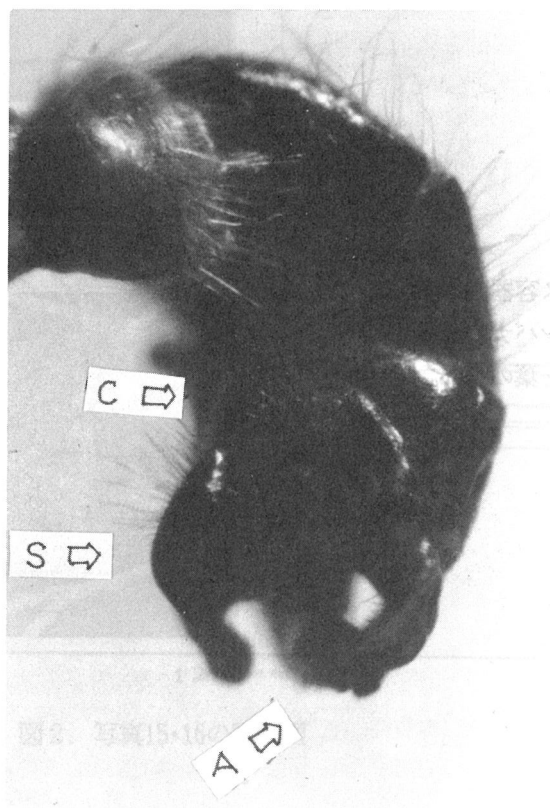


写真13. 産卵した?カワム  
ラモモフトハナアブ♀(左)  
と、ガラス容器内のヒガン  
バナの葉の基部内面に発見  
された本種?の卵。

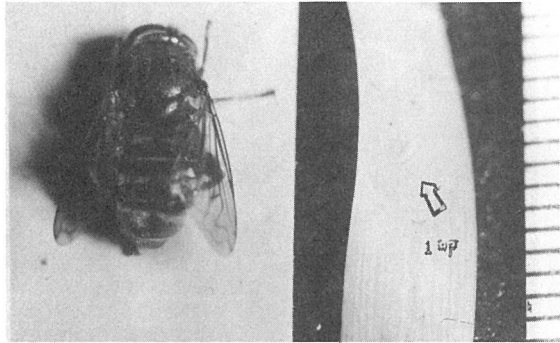


写真14. 同 (卵) の拡大。  
(長径約 1.3mm 前後,  
短径 0.4~0.5mm)

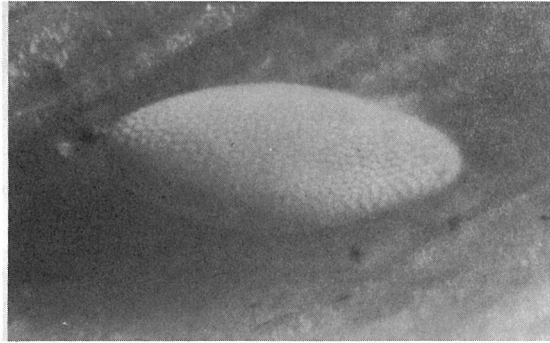


写真15. ガラス容器内で産  
卵されたヒガンバナの鱗茎  
(径約35mm) と葉の基部。

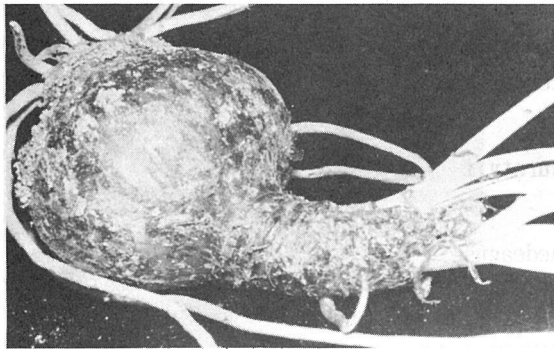


写真16. 写真15の拡大。  
中央の葉の基部に2卵、  
下部の葉の基部内面に1  
卵が産付されていた。

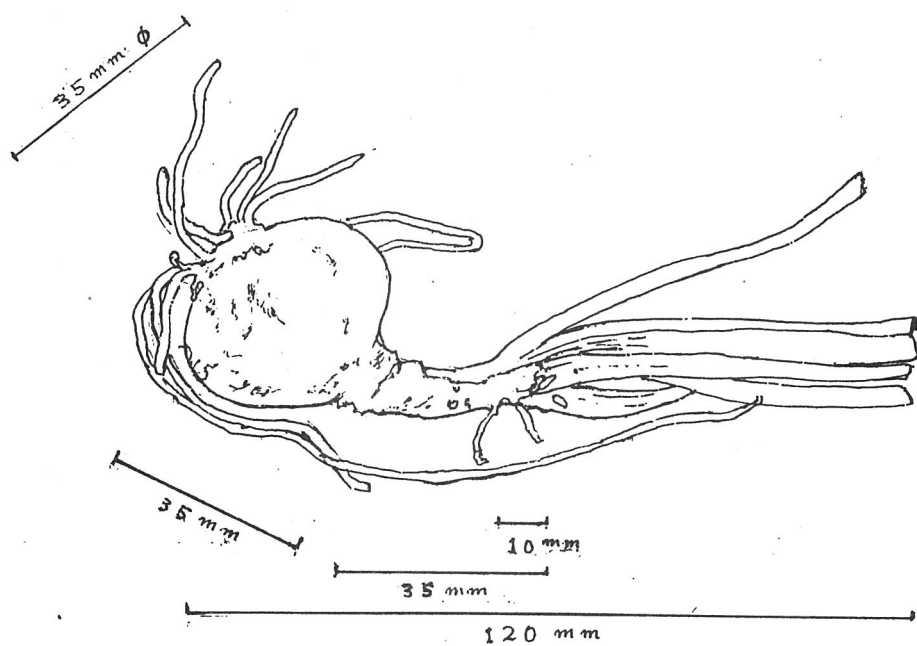
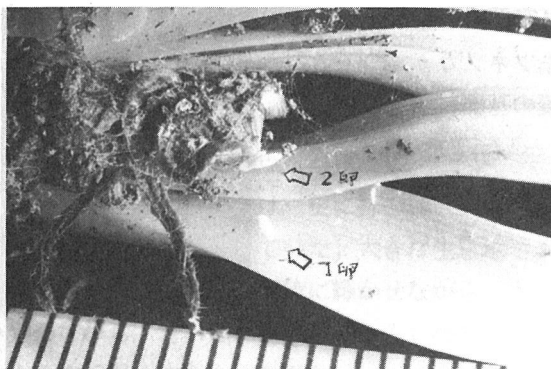


図2. 写真15・16の説明図

写真17. ガラス容器内で産卵されていたキツネノカミソリの鱗茎と葉の基部。

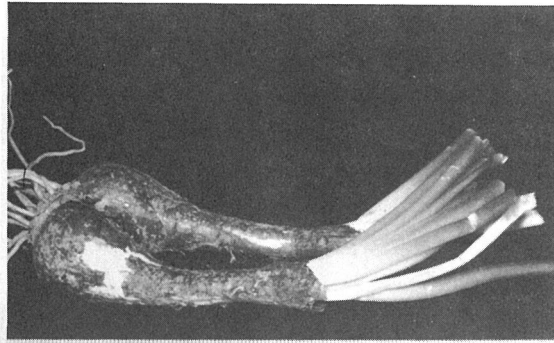


写真18. 同 拡大。  
下部の葉の内面に1卵が産付されていた。

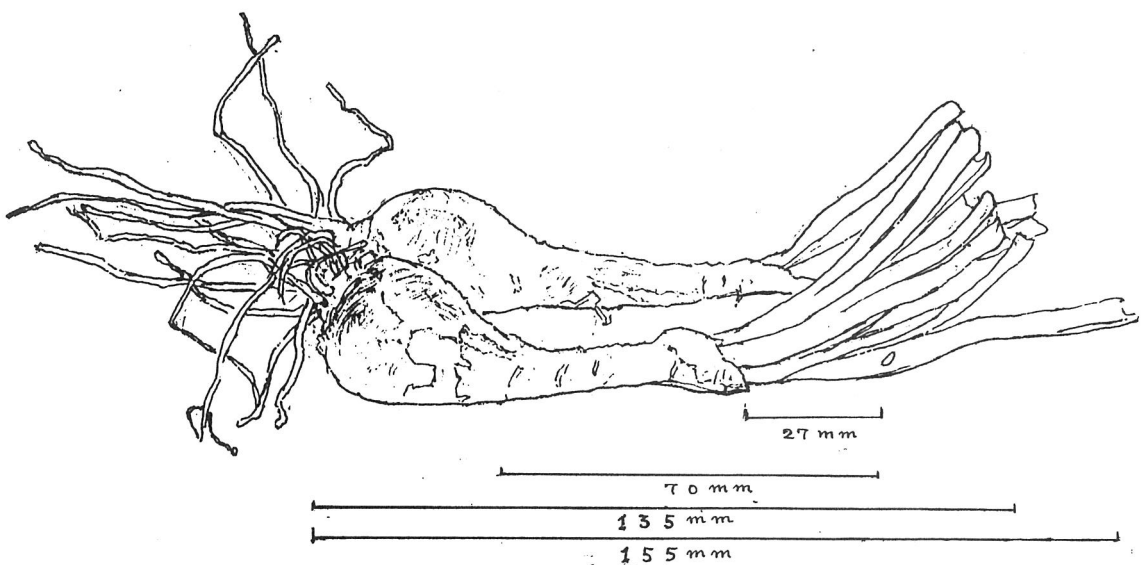
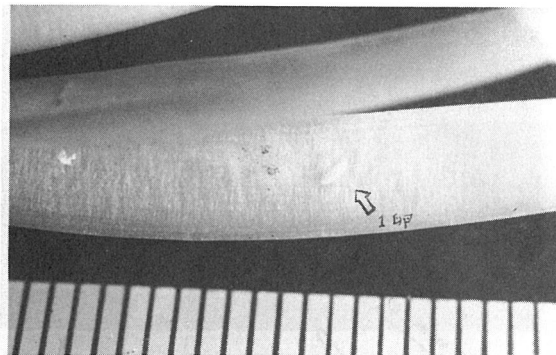


図3. 写真17の説明図。



林の中心部(北)方向に向かって続いていた。藪を抜けると、クヌギなどの雑木林で、林床は同様にヒガンバナやキツネノカミソリが密に混生する群落地帯で、そこには、かなりの数のカワムラモモブトハナアブが見られた。本種は、次々と現れてはそれらの群落の間を縫うように、低く、水平に飛んでは、ヒガンバナやキツネノカミソリ、他の野草や落葉などにとまっては休んでいたが、通常は、これらヒガンバナ科植物の群落からは遠く離れる事がないように見受けられた。思い掛けないところに、この地域の中心とも考えられる生息地が発見されたのであった(C地点、写真4)。

ヒガンバナ科の植物の群落と共に、この種のハナアブの姿は、更に林の奥(北方向に)、小さな沼の縁を廻って、北側の越辺川右岸(南岸; D地点)にまで続いていた。大きな生息地であった。・・・筆者は、木漏れ日のさすヒガンバナの黄ばんだ葉上に、体を黒褐色に輝かせながら、人知れず、静かに休むこのハナアブの野生の姿を静かにみつめながら、言い知れぬ感動をかみしめていた。

5月4日、大谷木川の川原のアブラナの株元近くでも1♀を得た。

翌5月5日は快晴、今度はA. B. C. D地点から、住宅団地を越えて数百m西方に向かった。越辺川右岸の岩井(重殿)の休耕田の草地(E地点、写真3)の黄色花上で3♀を得た。このE地点は、ゲンゲ(レンゲソウ)を主とし、ヤハズエンドウやムラサキサギゴケ、それにオヘビイチゴやキツネノボタンなどの黄色花が混ざった草地である。

これらの結果によって、本種は少なくとも、この時点では前久保(小蓋淵)と岩井(重殿)には分布していることが確認された。なお、同地の海拔は45-50mほどである。

### 〔生態〕

本種の成虫の生態については、これまでほとんど報告がなかったが、前述の通り、1983年4月下旬以降、筆者によって自宅のある団地裏の河畔林(毛呂山町の越辺川と大谷木川との合流点のデルタ地帯の雑木林、海拔高約45m前後)の林床に密に混在する、ヒガンバナとキツネノカミソリ(ヒガンバナ科ヒガンバナ属)の群落地帯に生息地が発見された。更に、この種の行動域(別の生息地?も含めて)が越辺川をさかのぼり、少なくとも、支流・毛呂川との合流点を越えて、更に若干、毛呂川をさかのぼり、私立越生高校付近まで、直線距離で約2Kmほど(岩井、G地点、図1)、前述のヒガンバナ科植物の群落に沿って、堤防上や、その付近の休耕地、越辺川右岸河川敷の梅林の林床(箕和田?, F地点、図1)などにまで及んでいることも判った。また、成虫の出現期は通常、♂は4月下旬前半から、♀はやや遅れて4月下旬後半頃から、両性の最盛期は4月下旬後半から5月上旬頃までで、5月中旬には成虫の出現期を終わるようであるが、この出現期については、年によって多少の変化がみられる。4月下旬に採集された♂の内、既に翅がボロボロに傷んだ1♂が採集されたことがあるが、事によると、これは成虫越冬の個体か、または異常に早い時期に羽化、出現した個体であったかも知れない。しかしながら、通常は、この時期の個体は新鮮であって、もし成虫越冬の個体であったとしても、この地では、それが常態であるとは考えがたい。前述の通り、訪花植物としては黄色の花(例えば、ヤマブキ・キツネノボタン・オヘビイチゴなど)を好んで訪れる。

通常、♂は花や♀(?)を求めて、♀は花や産卵場所を求めて(?), ヒガンバナ科の群落や、カキドオシなどの野草の間を縫うように、低く、水平に飛び、しばしば日当たりのよいそれらの葉上や、近くの落葉や枯れ枝などに降りては、かなりの時間、通常は翅を互いに重ね合わせて静止し、日光浴をす

る。稀に(1例のみであったが, 29. IV. 1984), クヌギの落葉の上で交尾する姿に接したことがある(写真6)。また, ♀は時折, ヒガンバナ科植物の葉端に舞い降り, 葉上を辿って, 葉の基部に向かって歩きはじめ(写真7), ときに, 腹端を葉面に向けて曲げて立て, 産卵と思わせるような姿勢をとりながら(写真8), やがて株元を覆っている落葉下に潜り込む。しばらくしてから再び落葉の下から姿を見せ, しばらくの間, 何かを探し求めるように歩きまわり, 落葉の下を出たり入ったりしていたが(写真9), やがて一連の行動を終えたようであった。

この時の観察では, 落葉の下で何がおこなわれているのかは知ることが出来なかったが, あるいは, 産卵行動がおこなわれているのかも知れない, と考えた。

一方, 前述の交尾した1♀を採集して生かして持ち帰り(29. IV. 1984), 浅い円形のガラス容器の中にヒガンバナ科植物(ヒガンバナ・キツネノカミソリ)を, 前者の1株は鱗茎を含めて長さ約12cmほど, 後者の2株は約13.5~15.5cmほどに葉先を切り詰めたものと, 黄色花のヤマブキとオヘビイチゴを共に入れ, 観察するために, 勤務先まで持参した。

5月8日, 昼の休息時間に容器の中を覗いてみると, 横たえてあるヒガンバナの1株の鱗茎の頸部から葉端に向かって, 約35mm(葉の基部の露出縁から約10mm)ほどの位置の, 外側を向いた葉の裏面に2卵, 内側を向いた葉の表面に1卵(写真13~16, 図2), 5月9日の夜にはキツネノカミソリの1株の鱗茎の頸部から約70mm, 葉の基部かの露出縁から約27mmほどの葉の表面(内側)に1卵, いずれも葉の基部の白い部分に, やや大型の卵(長径約1.3mmほど)が産付されているのが発見された(写真17, 18, 図3)。

その産卵行動そのものを直接みていなかったこともあって, 今日まで公表は差し控えてきたが(前述の, 野外において葉上を辿って歩き, 葉の基部を覆う落葉の下に潜入するという行動, その間の腹曲げ姿勢などを考え合わせた上で, この段階では確言はできないが), 少なくとも, 本種の♀成虫がヒガンバナ科のヒガンバナやキツネノカミソリの葉の基部(鱗茎に近い部分)に産卵する可能性が強いこと, そしてこれらの植物が, この種の寄主植物になっている可能性があることを, ここに示唆しておきたい(但し, 前述のガラス容器内の横たえられた植物に対する産卵が, この種の確かな産卵例であったとしても, 野外の自生状態の植物に対しても同様の状態で産卵がおこなわれ得るかどうかについては, 残念ながら未確認であることを, ここに付記しておきたい)。

参考までに, 上記の1♀の飼育中のデータを略記する。

29. IV. 1984 交尾済の1♀採集.
6. V. 1984 ヤマブキ, オヘビイチゴの花を容れる.
8. V. 1984 ヒガンバナに2+1卵発見.
9. V. 1984 キツネノカミソリに1卵発見.
10. V. 1984 母虫死亡.

(但し, 残念ながら, これらの卵は孵化しなかった。)

今後も, ヒガンバナ科植物(特にヒガンバナ, キツネノカミソリ)の群落地帯をよく調べれば, 埼玉県のみならず, 県外各地でも, カワムラモブトハナアブの生息地が発見させる可能性が強いと考えられることを, ここに付記しておきたい。

ちなみに, 前述の2種のヒガンバナ科植物について, 文献<sup>(14)</sup>の記述の一部を以下に要約してみた。

ヒガンバナ *Lycoris radiata* HERB. は、秋に花が終わった後に葉が出て、春には枯れ、結実はせずに鱗茎で繁殖し、一方、キツネノカミソリ *Lycoris sanguinea* MAXIM. は、夏に枯れ、よく結実もする。

前者は《蔓珠沙華；マンジュシャゲ》又は《死人花；シビトバナ》とも言われ、他にも地方名が多く、古くから人々に親しまれ、救荒作物として中国から持ち込まれたものと考えられている。鱗茎には多量のでん粉があるが、リコリンという水溶性の毒素を含んでいるので、そのままでは食べられない。鱗茎をすりおろして長時間水にさらせば、きれいなでん粉質を採ることができた。

という。後者も共に有毒植物とされており、このような植物にハナアブ科の1種の小昆虫が寄生するということになれば、まことに興味深い自然の営みの一つの証となろう。

#### 〔ヒガンバナ科植物の分布域〕

ヒガンバナ：北海道・本州・四国・九州・琉球；中国。

キツネノカミソリ：本州・四国・九州；朝鮮半島・中国。

#### 〔謝辞〕

本種の同定に際し、御教示や貴重な文献を賜るなど、たいへんお世話になった木村輝夫、福原栖男の両氏、並びにヒガンバナ科植物や一部の訪花植物の同定や御教示を頂いた、国立科学博物館の植物研究部の研究者の方々に対し、厚く御礼を申し上げる。

#### 〔参考文献〕

1. 朝比奈正二郎ほか (1965) 原色昆虫大図鑑 Ⅲ. 北隆館
2. 九州大学農学部昆虫学教室・日本野生生物研究センター共編 (1989) 日本産昆虫総目録 Ⅱ.
3. 原 勝司 (1978) 埼玉県の大翅類. 埼玉県動物誌 : 139-176
4. ——— (1981) 寄居町の自然. 動物編. 寄居町史 : 71-86
5. ——— (1987) 武甲山の双翅類. (武甲山の動物). 秩父武甲山総合調査報告書 : 281-287
6. ——— (1987) ハエ・アブ類. 荒川本流の陸生動物相. 荒川総合調査報告書, 1 : 665-668
7. 牧野富太郎 (本田正次編修) (1986) 原色牧野植物大図鑑 906pp.
8. 松村松年 (1916) 新日本千蟲図解 : 256-257
9. ——— (1934) 食蚜虻科. 日本昆虫大図鑑. 刀江書院 : 331-360
10. 宮本正一 (1934) 廣島産ひらたあぶ科 *Syrphidae* に就いて. 昆虫界 2(7) : 15-20
11. 素木得一 (1951) 石井ほか編. 日本昆虫図鑑(改訂版) 北隆館 : 1610-1648
12. SHIRAKI, T. (1968) Fauna Japonica *Syrphidae* Ⅲ.
13. Soos, A. et al. (1988) Catalogue of palaearctic Diptera, *Syrphidae*. Vol. 8, 363pp.
14. 高橋秀男(監修) (1990) 野草大図鑑. 北隆館
15. 高倉康男 (1983) 福岡県のハナアブ (4). 北九州の昆虫. 30(1) : 27-33
16. 玉木長寿 (1982) カワムラモモトハナアブを埼玉県毛呂山町, 兵庫県川西市で採集. 昆虫と自然, 17(14) : 17-19

.....

## 7月9日になにがおこったか？

樋田 光

.....

### その1

1991年7月9日、私は霧島山中の高千穂河原にいた。河原といっても川などは見当たらず、河原のようなゴロ石の道が、巨大な鳥居の下を山へ向かって続いているだけである。そして、その先にはこれから登らんとする高千穂の峰が、赤茶化した山肌を露にして、不気味にそびえたっている。

「成程、天孫降臨の伝説にふさわしい異様な峰だ、まさに生活史不明のタッパンルリシジミの棲家としては申し分がないナ。」

—— 等とつぶやきながらもう一度登山靴の紐を締め直し、登山道を進んだ。

道はやがて樹林帯を抜け、お鉢への急登へとかかる。この道はかつて高千穂の熔岩が流出した跡につけられたもので、進むごとにズルズルと崩れ非常に歩き難い。この頃から風が強くなりお鉢の稜線はガスに隠れて見えなくなっていた。

登っていく者は誰もいないが、山を下る人には何人か会った。

「まだ山頂までかなりありますか？」

「そうねエあと40分くらいかな」

ゲェ・・・この直登をあと40分も続けたら私のスマートなアキレス筋は断裂してしまうだろう。やむをえず稜線を見ながら歩く事をやめ、自分の眼前の岩肌だけを見て一步づつゆっくりと登る事にした。黙々と歩き続ける事十数分、下ばかり見ているうちにやけにゴミが目につきだした。

「全く神の山だというのに、神をも恐れぬ人のなんと多いことか・・・」

ゴミの第一は煙草のフィルター、続いて缶のリングプルである。赤茶化した岩肌にはこのふたつのゴミがやけによく目立つ。煙草を吸うのは勝手だが、吸う人のモラルは日本人は明らかに低い。恐らく埼玉昆虫談話会の会員にはこんな低モラルの人はまずいないはずだ（・・・と思う）。

ともあれ、ゆっくり登っているだけに何もしないで見過ごす訳にはいかない。私は埼玉昆虫談話会の会員なのだ（注：この部分は、他の同好会の会報に載せる場合は該当する同好会名に変更する事があります）。

突然、私自身も信じられないような事が起こった。何かの為にと思ってポケットに入れておいたビニール袋がある事を思いだし、とっさに目についたゴミを収容したのである。

エ〜ウッソー、自分でも信じられないのだから人が見たら気が狂ったとしか思えないだろう。しかし、私がタダでこんな偽善的行為をする訳がない。当然、胸の奥にはこれから到着するであろう高千穂山頂で、神様がきっとタッパンルリシジミを採らせてくれるに違いないという淡い願い（アマイアマイ）が渦をまいていたからである。

そして、その結果は思ったより直に現れた。岩影にひそむ巨大なミヤマクワガタを見つけ、立続けに真黒なオサムシまで拾ってしまったのである。

「これは幸先がいいぞ、もしかして本当にタッパンが採れるかも・・・ウヒヒヒ」

とらぬ狸の皮算用とはまさにこの事、野望に燃えた私のピッチは自然とあがり、そこからわずか10分程で中間点のお鉢のへりに到着した。しかし、この頃には風が強さを増しガスも湧いて5m先しか見えない状態となってきた。お鉢のへりは右側が旧火口、左側が山麓まで500mの急斜面でまさに蟻の戸渡りといった所である。

見通しのきかない細い尾根道を強風にあおられながら進むのは甚だ心細く、目的の高千穂の峰も時折きれるガスの切れ目からチラッと見えるだけで後は白一色だ。風はさらに強くなりゴォーという音とともに体が吹飛ばされそうな位となってきた。

「もう帰ろう・・・でも頂上まで行けばタッパンが・・・」

—— しばらく心のなかで葛藤が続いた後、決心して山を降りる事にした。帰りはザク道を滑るようになり、わずか15分で樹林帯へ到着した。振返ると山の半分はガスに覆われ登山者の侵入を拒んでいるかのようだ。

「ムム残念！この借りはきっとその内に・・・しかし、神様は見てくれてなかったのかナァ・・・」

時間をみるとすでに2時をまわり、こうして第一回目の高千穂タッパン作戦は見事に失敗に終わった。

## その2

高千穂河原から1時間、霧島山系のひとつ栗野岳の山麓にはカシワ林が点在し、九州では唯一のウスイロオナガシジミの生息地となっている。時期的にはやや遅いものの雌一頭さえ採ればあとは強制産卵でいくらかでもふやせる世の中なのだ。

とりあえずカシワ林を叩いてみたが何も飛び出さない、数人の採集者に成果を聞いてみたが1頭採ったと答えた人がわずかに一名いたのみであった。

「地元人間がこれじゃ他所者の私に採れるえ訳ないペナ〜」—— と言いつつもあきらめきれずゼフ竿をふりまわしていたが、飛び出したのは蛾ばかりで一向に成果が上がらない（市川先生ご免なさい）。

「これじゃなんの為のゴミ拾いだかわからない、タッパンは無理としてもせめてウスイロくらいは採らせてくれてもいいんじゃないの、霧島の神様！！」

こんな自分勝手な事ばかり言っている奴なんかどんな神様でも見離してしまっただけである。半ば諦めながら僅かな希望を持ちつつカシワ林の縁を歩いて行くと、いつしか道は牧場の中に入っていった。牧場といっても牛や馬はおらず周辺部にはオカトラノオや名前の分からない花が数多く咲いている。よくみると中には黄色いキクイモのような花の群落が目についた。

「オヤッ、あれはもしかしてハンカイソウとかいう花と違うかな、もしそうだとすればオオウラギンが好きな花のはずだが・・・、まあ、こんな所にいるはずはないし・・・」

もう時間も4時をまわり、そろそろ鹿児島にもどらなくてはならない。しかたなくネットをたたみながら車の方に歩き出し、なにげなくさっきの黄色い花を振り返って見た。するとその時、どこからかオレンジ色の大きな蝶がフワ〜と舞いおり黄色い花にとまったのが見えた。

「やけにデカイヒョウモンだな、でももしかして・・・」

——音をたてないようにソーッと近付いてみると、ギャワワワッ〜ン!

「こここれは、まぎれもないオオウラギン! しかも完全品のメス!!!」

思わず夢ではないかと思いホッペタをつねってみた。

「イタ〜イ」

腰をぬかしそうになりながら傍らのネットを握りしめ、とっさに身構えると。そんな事を知るよしもなく、彼女はジ〜ッと黄色い花で吸蜜を続けている。もう距離は2mもない、いまネットを振ればもう確実に彼女は私のもの・・・と思った瞬間、並の虫屋とは違う感覚が私の脳裏をかすめた。

「そうだ、カメラがあったんだ。早く写真におさめなくちゃ!」

自分でいうのもなんだが、この余裕を持つまでに5、6年はかかったことを忘れてはいけない。ともあれソーッとソーッと車に戻りカメラを取り出すと、後はまっしぐらに彼女のもとへ・・・。

「よかった、まだいる」

遠くから数カット、だんだん近付きながら数カット、最後に30cmまで近寄って撮り終わるとカメラを持つ手をネットにかえた・・・。

—— 結局、神様は存在した。 ——

しかし、なかなかすぐにごほうびをくれない事もわかった。これから山へ行く皆さん、くれぐれもゴミには注意しましょう。

.....

## ウラゴマダラシジミの飼育から

小堀 文彦

.....

筆者は、1990年の5月に埼玉県吉見町の八丁湖でウラゴマダラシジミの成虫を1♂2♀採集した。いずれも少しスレた個体だった。ウラゴマダラシジミは2年に一度くらいのペースで飼育しているし、いまさらスレた個体を標本にしたところでつまらないので、いっちょ強制採卵でもしてやろうかと思いたった。そこで、15×25×20cm程の雑貨屋で売っているような水槽形式のムシカゴの底に砂糖水をしみこませた脱脂綿を置き、そして産卵用の植物として、フィルムのケースにネズミモチを差した。

詳しく記録を取っていないので忘れてしまったが、2♀で100卵程産卵させたと思う。とれた卵は教科書通りにナイロンストッキングの中に入れ、庭木の地上1m程の所に吊るし、たま〜にホースで水をかけてやるくらいのルーズな管理で越夏・越冬させた。そして、今年(1991年)の2月から飼育を始めて、まあなんとか蛹が30個程できた。そこで、これらを使ってウラゴマダラシジミの累代飼育に挑戦しようと思った。

4月下旬から成虫が続々と羽化しだす。アゲハ類の累代飼育は何年かかけて経験を積んでいるので、ハンドペアリングの方法や、どのくらいの成虫を用意したらよいのか、あるいは、餌は何を一日どのくらい与えればよいのかなどという事はわかっているつもりだが、ゼフの累代飼育は何せ初めてなので、とりあえず、オスは羽化した順番に4頭を使う事にした。

4月25日。

蓋がメッシュで本体が透明の樹脂で出来ている安いムシカゴを4つ用意して、その中にオスを1頭づつ入れる。さて次は餌だ。「月刊むし」に樋田光氏がクロツバメシジミの成虫の餌にポカリスエットを使っているような事を書いていたので、盲信的な自分はさっそく自動販売機に走ったのだった。前年と同様に脱脂綿にしみこませて容器の底に置く。いいあんばいにウラゴマ達はポカリスエットを吸っている。よしよし・・・。

4月30日。

28・29日の連休が明けて、事務所に出てみるとメスの羽化が始まっていて、吹き流しの中では、ウラゴマが嵐の様に飛び交っていた。その中から元気のいいメスを4頭選んで、花婿候補の待っているムシカゴに放り込む。が、その日は何事もなくオスとメス是一つ屋根の下で過ごした。・・・多分。

5月1日。

朝から期待を込めて幾度となくムシカゴを覗いているのに、連中はうろうろと歩きまわっているだけだ。いよいよとなればハンドペアリングに挑戦するしかあるまいと思った。

1:05pm。弁当の用意のために何気なく振り向くと、4ペアのうちの一組が、容器の蓋の方にひと塊になっているような気配。顔を近づけて見ると、・・・ヤッターくっついてる。10分くらい前に覗いた

時にはそんな様子はちらともなかったから、きっとたった今カップリングしたにちがいないだろう。というわけで、交尾成立は1:05pm。交尾時間およそ2時間、3:00pmきっかりに結合は解除した。

ヤッタ、ヤッタとうとうくっついた！もっとやれ、もっとやれと、残りのカップルにも期待したのだったが成功組以外はとうとう最後までやらずじまいだった。もっとも、朝から晩まで付きっきりで監視していたわけではないので、本当のことは分からないが。

去年の強制採卵を思い出して、ネズミモチを産卵用の植物としてムシカゴに入れておく。

5月2日。

メスが産卵を始めた。4:30pmの時点で、23卵を産付。短日条件にならないと産卵を始めないというメスアカミドリシジミ属やミドリシジミなどとは、かなり違っているようだ。

5月15日。

しおれてきたネズミモチを取り替えてやった。夕方、卵を数えたら、初日からのトータルで193卵あった。まだまだ産みそうだ。

一方、未交尾と思われる他の3メスのうち、2頭がそれぞれ数個ずつ産卵していた。

5月25日。

死亡。最後には、脚が1本取れてしまい、フラフラになったが、それでも産卵をしようとしていた。

5月2日から、24日間で産んだ卵の数は、合計251卵になった。

腹部を開いてみたところ、16卵がなお残っていた。そこで、未交尾で死んだと思われるメスの腹部も開いてみることにした。結果は表の通り。

	交尾メス	未交尾メス1	未交尾メス2	未交尾メス3
産付数	251	7	—	3
蔵卵数	16	72	104	108
合計	267	79	104	111

どうやら、産卵すると、次々と新しい卵が出来てくるようだ。

なお、卵の数は、肉眼で確認できる範囲とした。

ご存じの通り、ウラゴマダラシジミの卵は、他の蝶には見られないような変わった形と色彩を持っている。解剖して驚いたことに、形はウラゴマ特有のものであるにもかかわらず、色はなんと淡緑色であった。例の赤褐色の色は、産卵中に着けられているものであるらしい事を付記する。



.....

## ホソオチョウの寄生バエについて

神久保 美津夫

.....

1990年9月中旬から10月上旬にかけて所沢市三ヶ島でホソオチョウの幼虫を観察した。越冬蛹と年内羽化してしまう蛹の割合がどの程度なものか調べるため9月9日, 9月29日, 10月7日の3回, 終齢幼虫のみ採集し蛹化させた。

9月に採集した124幼のうち60幼が越冬蛹となり64幼が羽化した。(羽化したものはもとの場所へ放蝶) 9月9日最終し蛹化したものから寄生バエの蛹が5 exs. 出た(1蛹から1蛹)。10月7日に採集した28幼は26幼は越冬蛹となり羽化したものは2蛹のみであった。また, 自然状態での蛹化場所を調べた結果,

- 1) 食草付近のススキの根本, 地上5 cmほどのところより3蛹発見, また羽化済みの抜けがらも2 exs. 発見した。
- 2) 食草上の葉裏に前蛹が1, 蛹が3つみつかった。

なお寄生バエについては次のようなデータとなっている。

*Sturmia* sp.

3♂♂ (1990年10月13日, 15日, 17日羽化)

1♀ (1990年10月18日羽化)

寄生バエの同定者 玉木 長寿

寄主 ホソオチョウ幼虫

寄主の採集地: 埼玉県所沢市三ヶ島

寄主の採集日: 1990年9月9日

蛹化日: 5蛹 1990年9月下旬~10月上旬

寄生バエ成虫の保管者: 玉木 長寿

同じ食草のウマノズクサを食べる三ヶ島のジャコウアゲハは9割近く寄生されているのに対し, ホソオチョウの寄主率は少ない。1991年9月8日現在も三ヶ島のホソオチョウのは健在であるが, 昨年度よりその数はかなり少なくなっている。ジャコウアゲハに関しては幼虫数頭(終齢)を観察したに過ぎなかった。

寄生バエの同定にあたり玉木長寿氏にご協力戴き紙面をかりて心よりお礼申し上げる。

.....

# 埼玉県産ハネカクシ科分布資料 [ 5 ]

小田 博

.....

今回は9種を追加する。本県産ハネカクシ科昆虫は、これで155種となった。なお、貴重な標本を提供していただいた内田正吉・碓井徹の両氏に厚くお礼申し上げます。

## 《ヨツメハネカクシ亜科 OMALIINAE》

147. \*カクムネヨツメハネカクシ

*Olophrum vicinum* SHARP, 1889

【秩父郡荒川村】熊倉山, 4頭, 3. xi. 1990

[溪流際落葉下].

148. \*フタモンヨツメハネカクシ

*Lesteva fenestrata* SHARP, 1874 <図1>

【秩父郡荒川村】熊倉山, 2頭, 3. xi. 1990

[溪流際落葉下].

## 《セスジハネカクシ亜科 OXYTELINAE》

149. \*ヒメクロセスジハネカクシ

*Anotylus laticornis* (SHARP, 1874)

【富士見市】上沢3丁目, 1頭, 22. iv. 1984 [糞].

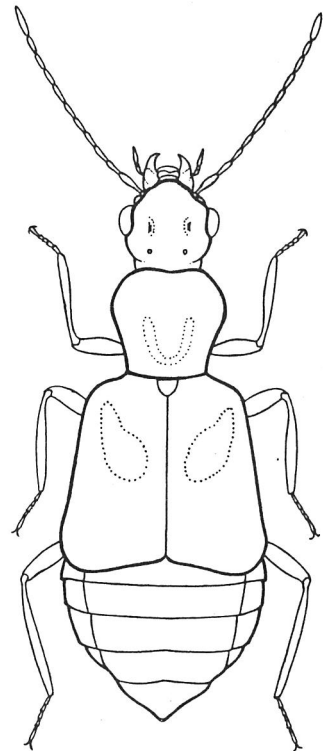
【入間郡三芳町】上富・多福寺付近, 1頭,

6. v. 1984 [腐植質].

【入間郡大井町】大井弁天の森, 3頭,

22. iv. 1985 [糞].

◆『原色日本甲虫図鑑(II)』では、九州, 対馬に分布するとあるが、すでに神奈川県(平野幸彦, 1981, 神奈川県 of 甲虫, p. 271), 静岡県(渡辺泰明, 1982, 甲虫ニュース, 57: 3)などから記録されている。



<図1> フタモンヨツメハネカクシ

## 《メダカハネカクシ亜科 STENINAE》

150. \*ナガメダカハネカクシ *Stenus (Stenus) kobensis* CAMERON, 1930  
 【秩父郡両神村】丸神滝, 1♂, 30. vii. 1990 [溪流際落葉下].  
 [参照文献: PUTUZ (1981), *Fragm. Coleopt.*, (29/32) : 123, Fig. 11.]
151. \*トビイロメダカハネカクシ *Stenus (Hypostenus) rufescens* SHARP, 1874  
 【秩父郡皆野町】城峰山, 1頭, 4. v. 1986 [内田正吉氏採集].

## 《ハネカクシ亜科 STAPHYLININAE》

152. \*ヒメクロハネカクシ *Ocypus brevicornis* WEISE, 1887  
 【入間郡日高町】日和田山, 1♀, 5. i. 1989 [アカマツ伐採樹皮下].
153. \**Phytolinus monitacta* NAOMI, 1984  
 【秩父郡小鹿野町】八丁峠, 1♀, 2. viii. 1989 [碓井徹氏採集].  
 ◆ 雌個体のために交尾器の比較はできなかったが, 原記載とよく一致する。基産地は山梨県・長野県。  
 [参照文献: NAOMI (1984), *Kontyû*, 52(3) : 386-387.]

## 《ヒゲブトハネカクシ亜科 ALEOCHARINAE》

154. \*ツヤケシシワチビハネカクシ *Silusa rugosa* SHARP, 1888  
 【秩父郡両神村】広河原付近, 1頭, 19. v. 1988 [朽木].
155. \*ハケゲアリノスハネカクシ *Lomechusa sinuata* (SHARP, 1888)  
 【秩父市浦山】大字浦山字毛附, 1頭, 9. viii. 1989 [走行中].

市川和夫氏採集の  
長野県南佐久郡川上村のシリアゲムシ

牧林 功

市川和夫氏は長野県南佐久郡川上村において、蛾の採集のかたわら、若干のシリアゲムシを採集し、標本を筆者にゆだねられた。同地は埼玉県側奥秩父の向こう側、つまり奥秩父山塊の西斜面にあたる。埼玉県側奥秩父と比較するさいの貴重な資料であるので、ここに報告しておきたい。なお、標本を寄せられた市川和夫氏に厚く御礼申し上げる。

採集記録

シリアゲムシ科 PANORPIDAE

A. シリアゲモドキ亜科 PANORPODINAE

- A-1. スカシシリアゲモドキ *Panorpodes paradoxa* MACLACHLAN  
2♂ 西股沢 (1,700m) 2-VIII-1986

B. シリアゲムシ亜科 PANORPINAE

- B-1. マルバネシリアゲ *Panorpa nipponensis* NAVAS  
1♂ 川上村梓山戦場ヶ原 11-VIII-1985
- B-2. ツマグロシリアゲ *P. lewisi* MACLACHLAN  
4♂ 金峰山荘 (1,600m) 2-VIII-1986
- B-3. ニッコウホシシリアゲ *P. leucoptera* UHLER  
1♀ 金峰山荘 (1,600m) 2-VIII-1986
- B-4. シバカワトゲシリアゲ *P. aralavae* MIYAKE  
2♂ 金峰山荘 (1,600m) 2-VIII-1986  
1♂ 金峰山 (2,200m) 2-VIII-1986

以上の記録から判断すると、廻り目平<sup>マワリメダイラ</sup>と称される金峰山荘付近 (1,600m) にはツマグロシリアゲがあり、少し登って西股沢 (1,700m) になるとスカシシリアゲモドキ・シバカワトゲシリアゲ・ニッコウホシシリアゲが出現し、シバカワトゲシリアゲは標高2,200m付近にも生息しているようだ。

1991年 埼玉県内におけるハルゼミの記録

内田 正吉

筆者は、1991年に埼玉県内の次の4ヶ所においてハルゼミの鳴き声を確認しているので報告する。

1. 比企郡鳩山町泉井 5月8日午前11時30分 (晴)  
1♂の鳴き声を聞く。
2. 比企郡小川町高谷 5月17日午前10時 (晴)  
マツの生育している丘陵地の林で、数個体が発音。
3. 大里郡寄居町末野 5月19日午前11時~12時30分 (晴)  
多数個体が発音。
4. 大里郡江南町板井 5月24日午後4時30分 (晴)  
2回ほど鳴き声を聞く。夕方近いこんな時刻に本種の鳴き声を聞いたのは今回が初めてであった。

(うちだ まさよし ☎361 行田市矢場 1-2-12 サニーコーポ行田 103)

ミンミンゼミの遅い記録

碓井 徹

筆者は、以下のとおり埼玉県内で10月にミンミンゼミの声を聞いているので、比較的遅い記録として報告しておく。

- 秩父郡横瀬町字根, 1991年10月4日 午後1時30分 (薄曇り)  
ミンミンゼミが1個体、数回にわたって鳴いているのを聞く。

(うすい とおる ☎362 上尾市壺丁目454-3)

和光市でウラギンシジミを目撃

柳田 恒一郎

和光市からは、すでにウラギンシジミの記録はあるようだが、筆者も1980年代に確認しているので報告しておきたい。

- 1♂, 和光市本町, 7-IX-1985 市街地にて目撃したものである。

(やなぎだ こういちろう ☎351-01 和光市西大和団地 1-4-301)

日高市・飯能市 秋のトンボ類

齊藤 洋一

1991年9月16日、碓井徹氏のご案内で、日高市（調査当日は入間郡日高町、10月1日より市制施行）のムカシヤンマの生息地を観察に行った際、日高市および近隣の飯能市で若干のトンボ類を採集したので報告する。

尚、当日ご案内いただいた碓井徹氏、一部幼虫の同定をいただいた松木和雄氏に感謝お礼申し上げます。

日高市台滝不動尊

カワトンボ科	カワトンボ	3幼虫	
サナエトンボ科	ヤマサナエ	6幼虫	
オニヤンマ科	オニヤンマ	1幼虫	
ヤンマ科	ミルンヤンマ	1幼虫	1羽化殻
トンボ科	ミヤマアカネ	1♀	マユタテアカネ 1♀

飯能市多峰主山

サナエトンボ科	コサナエ	1幼虫	
ヤンマ科	ミルンヤンマ	1♂	クロスジギンヤンマ 1幼虫(♀)
エゾトンボ科	タカネトンボ	4幼虫	
トンボ科	ヒメアカネ	10♂6♀	

(さいとう よういち 〒132 江戸川区平井 5-26-12)

ツノトンボ科2種の採集記録

柳田 恒一郎

筆者は、埼玉県内にて2種のツノトンボを採集しているので分布資料として記録しておく。

1) オオツノトンボ

1 ex., 皆野町箕山, 6-VIII-1983

山頂の水銀灯下に静止していた。本種は山地性の少ない種で、県内での記録も少ないようである。

2) ツノトンボ

1♂1♀, 和光市西大和団地, 21-IX-1986

かつて同所に広く存在していたススキ草原で得た。

(やなぎだ こういちろう ㊟351-01 和光市西大和団地 1-4-301)

## 手のルリタテハ

萩原 昇

秋も深まり、木々の紅葉が鮮やかさを増す季節になった、11月上旬のある日（5～9日のいずれかの日）。私が北側の廊下を歩いていると、突然に北風が吹き込んで来ました。その日は、小春日和で少し汗ばむような陽気でしたが、北風が運んできた寒気のためか、肌寒さを感じるようになったので、窓を締めようと窓ガラスに目を向けると、そこに1頭のルリタテハが弱々しく翅をバタつかせていました。「オー、ラッキー」とばかりに手をルリタテハに伸ばした・・・。

「ちょっと様子が違う・・・」。

通常なら、差し出した手を避けてルリタテハは逃げ惑うはず。しかし、この時は違ったのです。逃げるところか、差し出した指の先にしっかりと止まり、ゆっくりと翅をはばたかせたのです。正に「手のり」の状態になったのです。指に先にルリタテハを止めたまま周囲を一周、衆目的となりました。

可愛いではありませんか。「蝶を愛する気持ち」が、このルリタテハにも分かってもらえたと、私は思いました。私は、ルリタテハを指の先に止まらせたまま、日だまりに連れて行きました。そっと指から離すとルリタテハは、暫くはばたきを続け、元気に飛び去りました。

さらにこの日、私の蝶（超）能力を発揮する時が再びやってきました。4時ごろのこと、螢光灯のまわりを一匹のハエ（たぶんイエバエ）が弱々しく飛んでいました。これを見付けた俗世間の住人は、季節外れのハエに驚き、蠅叩きを探しまわっていました。私は、落ち着きはらって、ハエの飛ぶ方向に手を伸ばし、そっとハエが来るのを待ちました。目にも止まらぬ早業（さほど速くはなかった）で、ハエを手の中におさめました。周囲の人々はビックリ、武蔵の再来（これまた自己満足）。そして、ハエを窓の外に離しました。

今、考えていることは、もし龍宮城にお誘いがあつたら、「玉手箱はお断りしよう」。

（はぎわら のぼる ㊗344 春日部市梅田 614-1）

## ミスジシリアゲムシの記録

牧 林 功

ミスジシリアゲムシは山地性の稀少なシリアゲムシである。埼玉県外の記録であるが、分布上貴重な資料なので報告する。なお、この種は関東近辺では奥日光弓張峠に記録があり、田母沢博物館に収蔵されている\*が、近年は採集されていない。

ミスジシリアゲムシ *Panorpa trizonata* MIYAKE

1 ♀ 苗場（新潟県） 29-VII-1984, 小堀文彦氏採集。

1 ♀ 会津伊南村（福島県） 24-VIII-1989, 碓井徹氏採集。

福島県の記録はこの種の東限の記録になる。

貴重な標本をご提供いただいた碓井徹、小堀文彦両氏に厚く御礼申し上げます。

※ 杉本俊一郎（1986）日光のシリアゲムシ類、日光の動植物。（株）月刊さつき研究社。

（まきばやし いさお ㊗330 大宮市天沼町 2-864）

## 昆虫の視覚世界へのアプローチ (II)

碓井 徹

本連載の第1回は、なんと1986年発行の寄せ蛾記46号まで逆のぼらなければならない。これでは、とても『連載』などとは呼べないシロモノであるが、諸般の事情があって5年ぶりの連載第2回となった。少々言い訳をさせてもらえば、寄せ蛾記46号発行当時は、翌年発行予定の50号以降の新誌面作りにむけて毎号のように新しい試みをしていた時期であり、実は“第1回”を46号に掲載したのも、45号から始まった外注によるオフセット印刷で写真がどの程度きれいに出るかを知らなかったため、手持ちの写真に掲載してみる手段として1ページの原稿を急いで作りあげた、というのが真相である(45号にも46号にも写真付きの原稿がなかったのです)。その後も50号記念号・総目次・会員名簿などの発行、各地の公的な昆虫類調査への調査員としての参加など、なかなか第2回を準備する暇がないままここまで来てしまった。

この連載、タイトルが何やら意味不明であるが、第1回でも書いたように『虫屋による虫屋のための昆虫の視覚の解説』のようなものである。第1回は、わずか1ページの中にモンシロチョウの雌雄の有名な紫外線写真と、ヤマキチョウ♂の紫外線写真2枚をベタベタと掲載して『連載を始めるにあたって、挨拶代わりに・・・』などと短い文を書いてお茶を濁していたが、この5年の間に、これに関連する写真や文献等もある程度揃ったことなので、これからは心を入れ換えて(?)しっかりと連載していきたいと思っている。

さて、5年ぶりの突然の連載再開は、たまたま巡り会ったスジボソヤマキチョウの性モザイク個体を紫外線や3原色で撮影したところ、大変興味深い写真が撮れたことが引き金となった。これらの写真についての詳細は後述するが、とりあえず今回から3回の予定で、撮影方法に関する問い合わせの多かった紫外線写真について解説する。

まずは、基礎編である。

### 1. 紫外線写真の基礎

昆虫が紫外線領域に色覚をもっていることは、昆虫研究者のみならず、現在ではアマチュアの昆虫愛好家のほとんどが知っている事実であり、有名なモンシロチョウの雌雄の紫外線写真(写真5)などは高校の教科書にも載っている昨今だが、この写真の撮影方法となると意外に知られていない。この10年あまりの間に発行された昆虫関係の商業誌や学会誌にも、紫外線写真やそれに類似する方法を用いてチョウの色彩や斑紋などを検討した報告は、川床(1983)、工藤(1988)、松野(1981, 1984, 1986, 1989)など少なくないが、どの報文にも紫外線写真の撮影方法はほとんど記述されて



いない。

これらの報文に含まれているチョウの紫外線写真はどれも興味深いものであるが、私は、材料になっているチョウの紫外線領域での色彩や斑紋に関して、分類・系統的な私見を述べるほどの知識を残念ながら持たないし、この数年間に撮影し集積してきた紫外線写真も、紫外線領域での斑紋や色彩に対して、分類・系統的な考察を加える目的のものではなく、紫外線写真の撮影方法とその効果を自分なりに確立するための撮影が主な目的であった。

このような理由から、本連載では、各種のチョウやガの紫外線写真は撮影の実例として登場はするものの、その目的は、翅の色彩や斑紋などを分類・系統的に検討することではない事をあらかじめお断りしておく。

なお、本来ならば昆虫類の複眼の分光感度の解説、電磁波自体の波長ごとの名称や色彩との関係などを最初に説明すべきであるが、そのような少々専門的な周辺知識の解説は次回以降にまわして、まずは『誰でも撮れる紫外線写真』講座のような内容からスタートしたい。

#### 本項目における用語についての確認

- ① ここで言う『紫外線』とは、昆虫類の可視光領域である、波長330~400nmあたりの、いわゆる『近紫外線』あるいは『長波長紫外線』と呼ばれる範囲の光線を指す。
- ② 撮影に関する様々な用語は、読者が『一眼レフカメラの操作を一通り理解している』という前提で用いている。
- ③ ここで言う『紫外線写真』とは、昆虫の紫外線領域での斑紋や色彩を意識した目的で、紫外線を選択的に透過させて撮影する写真のことに限定しており、機材や撮影方法の解説もその目的に合った記述をしているので、ここで解説した紫外線写真の撮影方法が、医学や他の特殊分野でもそのまま応用できるとは限らない。

#### A. カメラとレンズ

まず紫外線写真に必要なカメラは特殊なものではなく、ボディは一般に流通している一眼レフカメラで十分である。レンズに関しても、標準レンズ系でマクロ機能があれば申し分なく、普通の標準レンズに中間リングなどを併用してもかまわない。ただし、ごく最近のレンズには、光学ガラスだけではなく、樹脂やプラスチックなどを併用したレンズも出回っており（特に、最近のAF一眼レフ用に開発されている、非球面レンズを用いた小型ズームレンズにこの系統のものが多らしい）、このようなレンズでは紫外線は十分に透過しない可能性がある。

#### B. フィルム

基本的にはカラーフィルムは紫外線写真に使用できないと考えたほうがよい。これは、ネガカラーにしてもリバーサルカラーにしても、フィルムベースに“紫外線吸収層”が存在しているためである。この層は、晴天の戸外での一般撮影で、太陽光線に含まれる紫外線の影響を受けて青味がかかった色調になりがちなのを防ぐことを目的としている。紫外線写真では、実際にはヒトに見えない領域の光線の反射を被写体にするのだから、カラーフィルムを用いて『紫外線写真は何

色で写るか?』といったことを考えるのは無意味である。

紫外線写真には、モノクロフィルムを使用する。光源にもある程度は左右されるが、できればISO 400程度の高感度のもを用いたい。私はこれまで [Tri X] や [T Max] を使用しており、通常はISO 400で用いている。

### C. 光源

ここでいう光源とは、もちろん紫外線を出す光源のことである。紫外線を含む光源としてもっとも身近なのは太陽光線であるが、季節や時刻、天候などに左右されるため、紫外線写真の光源としては意外に不安定である。本項は『基礎編』でもあるので、太陽光線を用いた方法は次号以降にまわし、ここではもっと安定した光源を考える。

夜間採集の道具として欠かせない蛍光灯や水銀灯も、紫外線を出すことはよく知られているが、両方とも以下の理由により、紫外線写真の光源としてあまりお勧めできない。

[蛍光灯] a : 光に拡散性があり、紫外線領域に構造色をもつ斑紋などを表現しにくい。

b : 光量が乏しく、フィルムを増感したり露出時間を長くとる必要がある。灯火採集で虫屋にはおなじみの [ブラックライト] は、可視光をほとんど出さずに紫外線を多量に出す特殊な蛍光灯だが、紫外線写真用の光源としては、光量の乏しさは白色蛍光灯とさほど変わらない。

c : 特に最近の蛍光灯の中には、紫外線を出さない処理をした製品も出回っている。

[水銀灯] a : 光に拡散性があり、紫外線領域に構造色をもつ斑紋などを表現しにくい。

b : 高価である上に、安定器が必要であったり発熱量が多いなど、取り扱いが面倒である。

これまで筆者が試してきた様々な光源で、もっとも良い成果をあげたのは、一般撮影用の [小型ストロボ] である。ストロボが紫外線を出していることは一般にはあまり知られていないことだが、紫外線写真の撮影法を解説したものには、光源の一つとして必ず登場する (荻原, 1983, 1985 など) ほどポピュラーなものである。

ここでは、紫外線写真の基礎編として、光源はストロボに限定して少し詳しく解説する。

まず、ごく普通に販売されているストロボが紫外線写真の光源としてすぐれている理由は、以下のとおりである。

[ストロボ] a : 紫外線量が豊富で、安定している。

b : 光に拡散性が少なく、紫外線領域に構造色をもつ斑紋などを表現する場合、簡単に照射方向を変えられる (写真1, 2)。

c : 比較的安価で小型であり、紫外線写真を撮影する目的以外にも標本写真の撮影に使えるなど、扱いやすい上に汎用性が高い。

紫外線写真を撮影する目的で新たにストロボを購入する場合の注意点は、『必ずしもガイドナンバーが大きいほうが紫外線量も多い訳ではない』という点である。これは、荻原 (1985) が指

摘しているが、一般には、『ストロボのガイドナンバーが低い方が紫外線量が多い』傾向があるらしい。

実際の紫外線写真撮影では、ピントのズレ（赤外線領域での赤外補正があるように、紫外線領域でもピントのズレは生じる。詳細は次回）をカバーするために絞りは出来る限り絞りたいので、光源から出る紫外線量が多いに越したことはない。筆者は、ガイドナンバーの大小による紫外線量の違いを確かめたことはないので、ガイドナンバーが小さいと紫外線量が多いとは断言できないが、筆者自身はガイドナンバー16の小型ストロボ（サンパック社製）を2灯使用して、撮影に支障のない程度の紫外線量を得ている。

また、ストロボの発光管内部では十分な紫外線量を出していても、発光管や発光部のカバーに使用されている素材の質によっては、ここで紫外線を吸収してしまう場合も考えられるし、ごく最近のストロボの中には、あらかじめ紫外線をカットするフィルターが装着されている可能性もある。これは、メーカーや製品によって個々に異なる問題であり、どのメーカーのどの製品が紫外線量が多いかは特定できない。

ストロボは、できれば同じ製品を2つ入手し、同時発光用のアダプターや延長コードなどを用いて、基本的には標本撮影と同じ要領で標本の左右両側斜め上から発光するように用いる。ワイドアダプターなどはあらかじめ外しておくこと。そして、光量はマニュアルでフル発光にセットしておく。

#### D. フィルター

おそらくこれが最も入手しにくい機材であろう。紫外線写真に用いるフィルターは、『紫外線を透過させ、可視光線を透過させない』性質のものを持ちいるわけで、一般撮影用の[紫外線フィルター]とはまったく逆の透過光特性を持っている。ここでは、この特殊フィルターの光学的な解説は省略し、入手すべき製品と入手先を以下に書く。

製品名：UV-D36C 50mm角(定価 3,300円) または、UV-D35 50mm角(4,000円)

入手先：(株)入江製作所 ☎103 東京都中央区日本橋本町 4-5 ☎ 03-3241-7671

上記の他にも、国内メーカーで同様のフィルターは製造販売しているが、上記のフィルターで十分に紫外線写真としての効果があげられる。なお、筆者は、他社の製品と上記のフィルターを比較して、この製品を勧めているのではないことを断っておく。

また、紫外線写真の目的に類似した目的で、3色分解用のフィルター3枚を用意しておくと、意外な写真が撮影できることがある(写真3)。

なお、実際に紫外線写真を撮影する際、レンズ保護の意味もこめて通常はレンズにネジ込んである『UVフィルター』は、もちろん外しておかなければならない。

さて、基本的な機材の説明が終わったところで誌面も尽きたので、実際の撮影法の解説は次回にまわすとして、ここで、これまで説明した機材を用いて撮影した紫外線写真と3色分解写真を掲載する。

特に、写真1～3のスジボソヤマキチョウのギナンドロモルフ個体は、当会会員の山崎浩氏のご好意で貴重な標本をお借りすることができた。写真の掲載を快諾されたことも含め、山崎氏には厚くお礼申

し上げる。なお、この個体のカラーによる通常の標本写真は、ご本人によってすでに発表されている（山崎, 1991）。64号掲載予定の次回は、紫外線写真の撮影法の基礎を具体的に解説する。

写真1～3. スジボソヤマ  
キチョウのギナンドロ  
モルフ。  
♂の形質が、左前翅の  
基部から先端部に向かっ  
て帯状にはいつている。  
写真は上から1, 2, 3。  
以下のデータは3枚共通。  
レンズ; 50mm標準レンズ  
中間リング併用  
フィルム; Tri X ISO 400

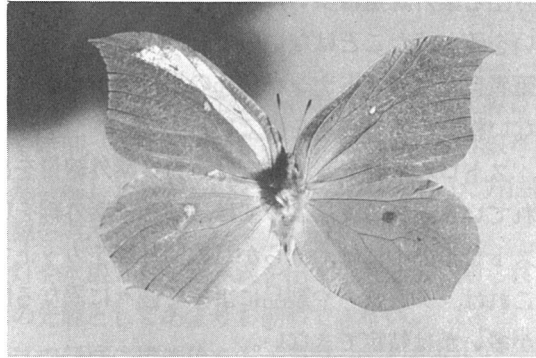


写真1. ストロボ1灯を右  
後翅の斜上から発光させ  
た紫外線写真。

♂の形質を持つ左前翅の  
一部が、紫外線領域の金  
属光沢をもって光ってい  
るのがわかる。  
フィルター; UV-D 3 5  
光源; ストロボ1灯 (GN16)  
絞り; F 4

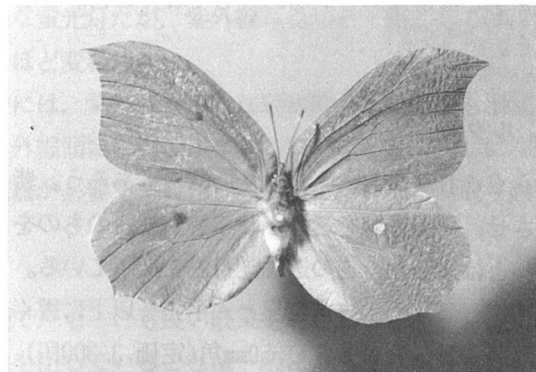
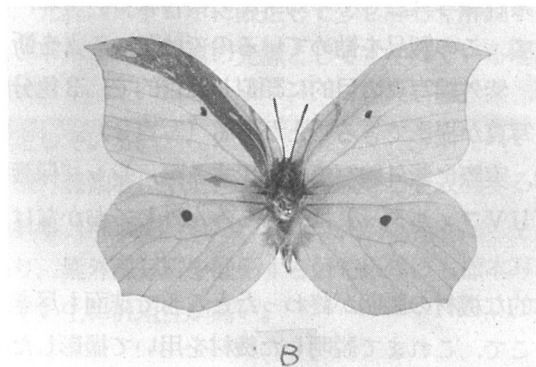


写真2. 写真1とは、ストロ  
ボの発光位置を対角線の反  
対側（左前翅斜め上）にセッ  
トした写真。♂の形質部分  
が光っていない。写真1と  
合わせて考えると、この部  
分は紫外線領域を反射する  
構造色であることがわかる。  
データは写真1と同じ。

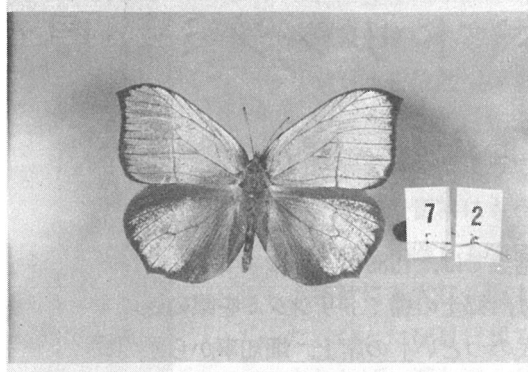
写真3. これは紫外線写真で  
はなく、3色分解用の青色  
フィルターで撮影した写真。  
♂の形質部分が青色光の領  
域を吸収して黒っぽく写っ  
ている。この他にも赤と緑  
のフィルターで撮影してい  
るが、このような効果はで  
なかつた。  
フィルター; 青色フィルター  
光源; ストロボ2灯 (GN16)  
絞り; F 11



## 写真4. ヤマキチョウ 正常♂

の紫外線写真。ストロボを  
両側から発光させている。  
本種の♂には、前後翅に  
紫外線領域を反射する、  
大きな金属光沢斑がある  
のがわかる。

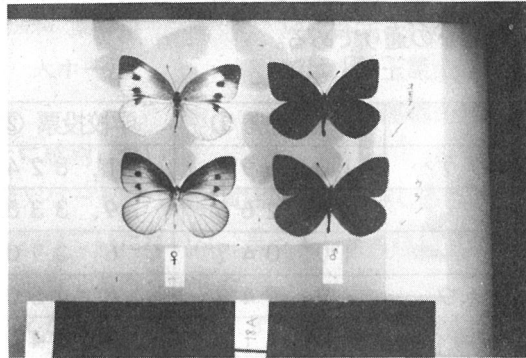
レンズ; 50mm標準レンズ  
中間リング併用  
フィルム; Tri X ISO 400  
フィルター; UV-D 35  
光源; ストロボ2灯(GN16)  
絞り; F 8



## 写真5. モンシロチョウ 雌雄

の紫外線写真。

レンズ; 50mm標準レンズ  
中間リング併用  
フィルム; Tri X ISO 400  
フィルター; Wratten 18A  
光源; 太陽の自然光  
絞り; F5.6 シャッター 1/8秒



## 【引用・参考文献】

- 川床正治, 1983. Pieris属3種の紫外線の反射に基づく雌の認知. 昆虫と自然, 18(1):18-24, 30.  
 講談社編, 1981. 写真大百科事典 4 (Kodak Encyclopedia of Practical Photography 4).  
 講談社, 東京.  
 工藤 忠, 1988. ツマベニチョウ属の紫外線写真. TSUISO, (548):37-42.  
 松野 宏, 1981. “紫外色”を感覚的に理解する方法. ちょうちょう, 4(9):32-29.  
 ———, 1984. Gonepteryx属の黄色の雌について. ちょうちょう, 7(10):16-19.  
 ———, 1986. 紫外線と蝶の色彩・斑紋. ちょうちょう, 9(4):53-59.  
 ———, 1989. シロオビアゲハにおける擬態と認識色. やどりが, (140):2-11.  
 荻原 稔, 1983. 紫外線写真. カメラ・レンズ百科, pp. 222-224. 写真工業出版社, 東京.  
 ———, 1985. 紫外線写真の撮影. 写真撮影百科, pp. 211-215. 写真工業出版社, 東京.  
 山崎 浩, 1991. スジボソヤマキチョウの性モザイク. 蝶研フィールド, 6(1):27.

## ミドリシジミ， 県の蝶に決定

牧林 功

埼玉昆虫談話会では、1989年4月に「ミドリシジミ委員会」を発足させてから、同委員会を中心に約2年半にわたり、郷土の蝶ミドリシジミを県の蝶にするために、運動を重ねてきた。その結果、去る11月14日の「県民のつどい」の席上、畑知事から県の蝶にミドリシジミを制定する旨の発表があり、この運動は決着した。

選定方法としては、一般投票と学校投票との2本立てで行われた。一般投票は県内在住、在勤、在学者を対象に、官製はがきによる県庁への直接投票と県内各地に設けられた投票場所231箇所（公的機関159、民間72）への投票用紙による投票で1991年7月25日から8月31日にかけて行われた。学校投票は県内の公立小中学校から抽出した228校で、9月2日から9月10日にかけて実施された。

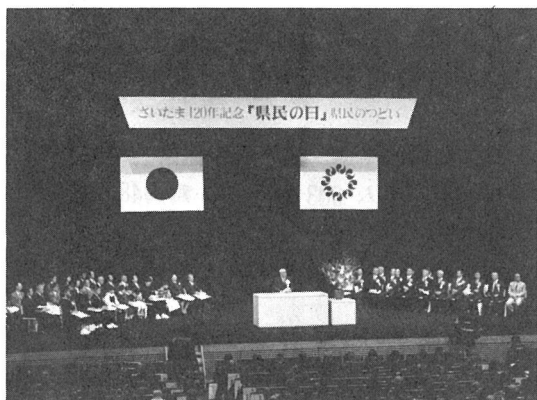
その投票結果は以下の通りである。

	一般投票 ①	学校投票 ②	投票総数 ①+②
ミヤマカラスアゲハ	10,691	11,824	22,515
ゴマダラチョウ	9,265	9,338	18,603
ミドリシジミ	10,047	6,370	16,417
ウスバシロチョウ	7,949	8,450	16,399
ベニシジミ	4,815	2,840	7,655
合 計	42,767	38,822	81,589

11月8日、選定委員会が開催され、この結果をふまえて論議された。

選定結果は県民投票で最上位に支持されたミヤマカラスアゲハとミドリシジミが選定候補として残り、時間をかけて慎重に検討された。その結論として、ミドリシジミが県平野部の原風景を代表するハンノキ林に生息し、今後の自然保護の取り組みのなかで希少な埼玉県の原風景を保全していく際の指標として価値が高い点が評価され、最終的にミドリシジミが選定された。（記者発表資料による、下線は筆者）この結果は同日午後、村本達郎選定委員会々長（埼玉大学名誉教授）から知事に報告され、11月14日の埼玉120年記念「県民の日」県民のつどい席上、知事から県の魚ムサシトミヨとともに発表された。かくしてミドリシジミが埼玉県の蝶に決定したわけで、会員諸氏とともに喜びたい。

ここまで到達するのに、会員各位には貴重なアイデアを出していただいたり、多くの奉仕をしていただいた。ミドリシジミ委員会によるニュースレター紙「ネオゼフィルス」の発行、3回にわたるミドリシジミを知る集いと4回行われたミドリシジミを見る集いの実施、浦和、熊谷、秩父で行った昆虫展など枚挙にいとまがない。誌上を借りて、改めてお礼を申しあげる。



さいたま120年記念「県民の日」記念式典において『県の蝶 ミドリシジミ』を発表する・畑和 県知事  
1991年11月14日 大宮 ソニックシティ 大ホール

この運動は早期から「埼玉県の原風景」をいろいろの蝶としてミドリシジミを位置づけて運動を展開してきた。これは選定経過にも良い影響を与えたようで、選定結果の記者発表資料にもうかがえる。

また各種催しものには、マスコミ各社に多大なご協力をいただいた。ひとたびNHKでオン・エアされれば、遥か遠くから参加する方がでた。これは驚きでもあった。朝日新聞埼玉版では今年4月から5月にかけて、「埼玉バタフライ物語」を連載され、県内読者を大いに啓発された。埼玉新聞県南版では「埼玉昆虫の世界」を15回にわたって連載された。共にミドリ

シジミを宣伝する場を設けていただいたことに感謝したい。

さらに埼玉会館、熊谷市立図書館、八木橋デパート、八尾百貨店にもお礼申しあげる。それぞれの展覧会の片隅に「ミドリシジミ・コーナー」を設けていただいた。言ってしまうと目立たない小さな蝶・ミドリシジミを、最大限に美化するのに役立ったであろうからだ。

反省材料も多くある。その第1は投票の詰めが甘かったこと。8万票を越える投票があろうなどとは思わなかったがそれでも詰めを欠いたうらみはある。もっと泥臭く執拗にやるべきだった。選挙と同じで投票なのだから、ドブ板を渡ってでも集票する必要があった。選定委員の方々の良識に救われた感じだが、これで落選していたら、悔いを千載に残すことに成りかねなかった。

一般投票ではそこそこに善戦したのは、ミドリシジミ委員会の活動の成果であると確信するのだが、学校投票の惨敗は学校関係への働きかけが足りなかったからであろう。投票に参加した学童の多くが、おそらく美人コンテスト並に、ポスターや標本による人気投票になって、郷土の風景と結び付いた蝶を選ぶという視点を欠いたからであろう。この反省材料は、もし他の都道府県で同様なことがなされる場合、参考にしていただきたいものである。

ともかく、ミドリシジミに決まった。これからは県内各地で、ミドリシジミの生息する林を残していくことだ。幸いにして、ミドリシジミはまだまだ県内各地に生息地を持っている。それぞれの市町村で「県の蝶ミドリシジミの舞う林」をつくりあげ、そこに野生動植物のシェルターとしての機能を持たせたい。そうすれば、このミドリシジミの林が埼玉県における新しい環境教育の場として、大きな意義をもっていくであろう。



寄 せ 蛾 記 62号 目 次

碓 井 徹	: 石戸宿, その後 (1) . . . . .	1189
中 川 利 勝	: 埼玉県産蝶類記録 (2) . . . . .	1205
	: 訂正 (中川利勝) . . . . .	1208
雛 倉 正 人	: 所沢市三ヶ島の甲虫類 (追加記録) . . . . .	1209
玉 木 長 寿	: 埼玉県の興味ある双翅類 (3) . . . . .	1212
樋 田 光	: 7月9日になにがおこったか? . . . . .	1226
小 堀 文 彦	: ウラゴマダラシジミの飼育から . . . . .	1229
神久保美津夫	: ホソオチョウの寄生バエについて . . . . .	1231
小 田 博	: 埼玉県産ハネカクシ科分布資料 [5] . . . . .	1232
牧 林 功	: 市川和夫氏採集の長野県南佐久郡川上村のシリアゲムシ . . . . .	1234
内 田 正 吉	: 1991年 埼玉県内におけるハルゼミの記録 . . . . .	1235
碓 井 徹	: ミンミンゼミの襲い記録 . . . . .	1235
柳田 恒一郎	: 和光市でウラギンシジミを目撃 . . . . .	1235
斉 藤 洋 一	: 日高市・飯能市 秋のトンボ類 . . . . .	1236
柳田 恒一郎	: ツノトンボ科2種の採集記録 . . . . .	1236
萩 原 昇	: 手のりルリタテハ . . . . .	1237
牧 林 功	: ミスジシリアゲムシの記録 . . . . .	1237
碓 井 徹	: 昆虫の視覚世界へのアプローチ (II) . . . . .	1238
牧 林 功	: ミドリシジミ, 県の蝶に決定 . . . . .	1244
	会員名簿正式追加版 . . . . .	1246
	会 報 . . . . .	1247
	編集後記 . . . . .	1248